

平成19年度

# 北海道高等学校教育研究会 会 報

第 88 号

## ご 挨 拶

北海道高等学校教育研究会

会 長 金 間 正 克

後ろを振り返るとすぐそこに、昭和の終わり平成の始まりがありました。平成生まれの新生を迎えたとき一様に驚き、まもなく平成生まれの仲間が教壇に立つ日もそう遠い先ではありません。

会場の皆さん、明けましておめでとうございます。本日は全道各地からこのように多くの会員や教育関係者が第45回高教研に参加していただき誠にありがとうございます。また本日は公務多忙の中ご来賓として北海道教育委員会教育長吉田洋一様、札幌市教育委員会教育長奥岡文夫様、北海道高等学校長協会会長小原信夫様、並びに本研究会顧問の染谷昌志様、

武田泰明様、青塚健一様のご臨席を賜りましたこと、深く感謝いたします。

本研究会は創立45年を迎えます。今年度も研究主題である「新しい時代を切り拓く高等学校教育の創造」を掲げ、各教科ではさらに具体的テーマを設定して研究を推し進めているところです。この研究会は、全道各地から一堂に会して2日間にわたる研究協議を活発に行い、会員相互の純粋な研修の場として、また年4回の会報と研究紀要の発行を含め全国的には例を見ないものとして、誇れるものと思っております。

今年度の会員登録数は約三千百名と昨年度と同程度にこぎつけることが出来ました。実は加盟第1次集約の段階では、三千名を下回り大いなる危機を感じました。しかし、その危機をバネに高教研14の支部代表校や、昨年から加盟頂いた私学の校長先生方に訴えた結果、大台の三千名を越えることができました。この会場におられる先生方の意識の高まりと努力の賜物と心より感謝申し上げます。

本日の全体講演では、慶応義塾大学教授金子勝先生をお招きすることができました。金子先生は、常に「現実で何が起きているか」という視点を持ちつつ、現実社会の制度・政策を論理的に分析、検証しておられます。単なる二項対立を越えた大きな視野を持つために、様々な理論や事実を知ることだけでなく、物事の根底にある理念まで追求することが必要であると、述べておられます。多くのテレビ出演でお馴染みでもあり、鋭い切り口で語られる講演を楽しみにしております。

さて、2007年は漢字1字で表現すると「偽」と命名されました。一昨年の「命」には子供の誕生という喜ばしい意味も含まれていましたが、昨年の一字には明るさが感じられません。更に北海道の企業がそれに一役かってしまったことは、誠に残念と、言わざるを得ません。そんな中、道内では明るい話題もありました。北海道日本ハムファイターズのパリーグ連覇とコンサドーレの6年ぶりJ1復帰です。ヒルマン



監督の最後の言葉「信じていました」の表現はスポーツ界のみならず、教育界にこそ浸透させたいものと思っております。

ところで、昨年度教育に関する二つのデータが日本中を覆いました。一つは43年ぶりに行われた義務教育の学力テストであり、他の一つは OECD 国際学習到達度調査2006年です。学力テストは北海道の全国順位、PISA は日本の世界順位を明らかにし、共にその結果が酷評されました。特に、後者は「PISA ショック」とも言われ、今後の教育に大きな影響を与えかねない状況を作りだしました。しかし、少し見方を変えてみるなら、教育に関する世論の盛り上がりの効果をもたらし、国家百年の計はいかにあるべきかを論ずる絶好のチャンスと捉えることができるのではないのでしょうか。さらに多くの識者の発言によって、私達教師はどうあるべきかの答えが一つに収斂していくこともあるのではないかと考えております。

例えば「学力向上」についてです。かつて PISA の研究員として、前回の調査にも係わられた政策研究大学教授の「岡本薫」先生はこう述べておられます。「論議はムードで進んではいけない。国際順位が何位になれば目標が達成されたというものではない。読み・書き・計算など、日本の子どもに必要な力は何か。全員に必要なミニマムな目標とそれ以外の目標を設定する必要がある、それらを検証し次に結びつけること」と。すなわち「学力向上」にまず必要なことは、真に学ぶべき内容の分析と把握であり、他の一つはそれを教える側の力量を意味します。また私は、今回の二つのデータの中で最も憂慮すべきは「学習意欲の低下」にあるのではないかと考えております。つまりデータの中で、子ども達は「一所懸命勉強しても、幸せになれると思っていない」ということを私達に突きつけたのではないのでしょうか。勿論現在の社会情勢や大学全入時代、就職難などが要因となっているとも言えます。それ故今こそ学ぶことの楽しさや、感動や達成感を味わうことを教師と共に教え合っていく仕組みが必要ではないのでしょうか。教育の目的は、人間の幸福とは何かを考えることでなければならないと考えております。

また、教える側の力量に関して言うなら、医師の世界と比較すると一目瞭然です。私達は、技術や知識に不安を感じる医師に治療を任せる勇気はありません。私達が置かれている状況はこれなのです。間もなく「教員免許制度」が導入されますが、このような制度の有る無しに係わらず、私達は教えるプロとして、自らを教育していかなければなりません。さて、本研究会はまもなく半世紀を迎えようとしています。研究会が正しく成長するためには、二つの条件が必要です。一つは、いかなる研究も自由に発表されるという「学問の自由」が確保されることであり、他の一つは、研究がなされる上での「財政的基盤」の確保です。会の運営にあたる私たちは、この二つの条件を明確に区分しながら、しかもその二つを確保することに努めなければなりません。半世紀に向かってより魅力ある研究会となるよう鋭意努力してまいります。

最後になりましたが、ご参加の皆様のご健勝と益々のご活躍を祈念し、開会にあたっての挨拶といたします。ご静聴ありがとうございました。

# 第45回大会の報告

## 第一日・全体集会

### 来賓祝辞

北海道教育委員会  
教育長 吉田洋一様

新年明けましておめでとうございます。

第45回北海道高等学校教育研究大会の開会に当たり、一言御挨拶申し上げます。

全道各地から約2,000名の先生方が参加され、本研究大会がこのように盛大に開催されますことは、誠に喜ばしく、心からお祝いを申し上げます。

また、北海道高等学校教育研究会が、長年にわたり各地で充実した活動を続けられ、本道の高等学校教育の発展に大きく寄与されておりますことに、敬意を表しますとともに、各学校の先生方には、日頃から学習指導・生徒指導などに情熱を注いでいただいておりますことに、改めて深く感謝を申し上げます。

さて、私は、昨年も多く道の立高校を訪問し、授業や実習、部活動の様子などを見せていただきました。

どの学校でも、先生方が日々研鑽に努め、授業を大切にしていることがうかがえるとともに、子どもたちが夢や目標の実現に向かって真剣に学習に取り組み、生き生きと活動している様子に、いつも感銘を覚えています。

そして、その時々思うことは、子どもたちが可能性を大きく広げていくことができるよう、我々教育関係者が全力で応援することが大切であること、また、子どもたちの成長は、やはり先生方の指導によるところが大きく、それゆえに、保護者や地域の方々からの、学校や先生方に対する期待が非常に大きいということです。

こうしたことから、先生方におかれましては、これまで以上に保護者や地域の方々の期待や信頼に応えていくため、日頃から自己研鑽に励み、切磋琢磨しながら相互に学び合い、教師としての資

質や能力を常に高めていただきたいと考えております。

そこで本日は、先生方に3点ほどお話をさせていただきます、御挨拶に代えたいと思います。

1点目は、学力の向上にかかわることです。

御存知のとおり、昨年12月に2006年PISA（ピサ）調査の結果が公表されました。

今回は科学的リテラシーが中心分野でしたが、読解力を含め、様々な課題が明らかになっております。

こうした課題の多くは、昨年4月に国立教育政策研究所が公表した「平成17年度教育課程実施状況調査」の分析結果や、国や道の学力向上に係る研究指定校の先生方が中心となって本道が独自に実施している「学力等実態調査」の分析結果においても既に把握されているものでありますが、重要なことは、国際的な比較にとどまらず、本道の高校生全般、または各学校における生徒の学力の状況を正確に把握し、各学校の実態に応じて学習指導方法の見直しを図るなどして、具体的な授業改善につなげていくということにあります。

先般、中央教育審議会では、学習指導要領改訂に向け、「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」を公表しました。

内容については、全ての先生方に配布されているパンフレットで御承知のことと思いますが、この後本年1月の答申を経て、新しい学習指導要領が告示される予定となっております。

先生方におかれましては、新しい学習指導要領においても継承される、「『生きる力』をはぐくむ」という現行学習指導要領の基本理念を実現するため、今後とも授業改善に努め、確かな学力の向上に取り組んでいただくよう、お願いいたします。

2点目は、豊かな心や健やかな体の育成についてです。

各学校においては、社会体験・自然体験活動や

道徳教育の充実を図るなどして、豊かな心の育成などに取り組んでいただいているところであります。

一方、平成18年度の生徒指導上の諸問題に関する調査では、高等学校におけるいじめの認知件数は、いじめの定義や調査項目が変更になったこともあり、前年度の発生件数と比較して大幅に増加したところですが、各学校においては、件数に一喜一憂するのではなく、保護者や関係機関との緊密な連携のもと、アンテナを高くして生徒の発する小さなサインを敏感に受け止め、いじめを早期に発見して、速やかに解決することが大切です。

命を大切にす指導とあわせて、いじめの根絶に向け、一層の取組をお願いいたします。

道教委といたしましても、各学校において生徒が心豊かに生き生きと学び、それぞれの個性を最大限に伸ばしながらたくましく成長することができますよう、学校運営への支援や条件整備に努めてまいりたいと考えております。

3点目は、本道における教育の動向についてであります。

昨年、私はこの大会で、「平成19年は、教育改革の大きな節目であり、高等学校教育が新たなスタートラインに立った年である」と申し上げました。

道教委といたしましては、「北海道教育ビジョン」でお示した「自立」と「共生」を柱とする理念の実現を目指し、本年度末までに平成20年度以降の新しい教育計画を策定するとともに、「新たな高校教育に関する指針」に基づく各種の施策については、可能な取組から順次実施しているところであります。

昨年11月から12月にかけて、高等学校と大学の関係者が一堂に会して高大連携に関する情報交換や協議を行う「北海道高大連携フォーラム」や、先生方の授業実践力の向上を目的とした「授業実践研究セミナー」を開催し、多くの先生方に御参加いただきました。

更に今月中には、総合学科、普通科単位制、中高一貫教育、フィールド制の導入校及び今後の導入予定校が当面する諸課題について研究協議を行う「北海道高等学校教育改革研究協議会」を開催

することとしております。

各学校におかれましては、これまでの教育活動を点検し、課題の整理を行うとともに、それぞれの地域において各学校に期待されている役割を改めて認識していただき、こうした事業に積極的に参加して、学校課題の解決や、学校運営の一層の改善・充実に役立てていただきたいと考えております。

以上、3点について、お話しさせていただきましたが、何よりも「教育は人なり」であります。

先生方におかれましては、この言葉を肝に銘じ、今後とも北海道の高校教育の充実のため、御尽力いただきたいと考えております。

結びになりますが、本日から2日間にわたって開催される本研究大会が、皆様の今後の教育実践に資する、心に深く刻まれる大会となるよう御期待申し上げますとともに、皆様の御健勝と北海道高等学校教育研究会の益々の御発展を祈念申し上げます、お祝いの言葉といたします。

札幌市教育委員会

教育長 奥岡 文夫 様

あけましておめでとうございます。札幌市教育委員会教育長の奥岡でございます。北海道高等学校教育研究大会の開会にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

先生方におかれましては、日頃から高等学校教育の充実のために尽力されておられますことに対しまして、この場をお借りいたしまして、改めて感謝申し上げます。

また、本日、全道各地からこのように大勢の先生方がお集まりになり、本研究大会が盛大に開催されますことは、誠に喜ばしく、心からお祝い申し上げます。

本研究大会は、昭和38年の発足以来、今日に至るまで、日常の教育実践を基盤としながら着実に研究実績を積み重ねられ、札幌市はもとより全道の高等学校教育の充実に多大な貢献をされてこられました。このことに対しまして、深く敬意を表しますとともに、事務局として、様々な形で本研究大会を支えてこられた札幌旭丘高等学校の教職

員の方々をはじめ、関係各位の皆様のご労苦に対しまして、心からお礼申し上げます。

さて、皆さまご承知のとおり、今、教育界は大きな転換期を迎えております。一昨年12月に、約60年ぶりに教育基本法が改正され、これからの教育のあるべき姿、目指すべき方向性が明らかにされました。このことを受けまして、昨年6月には、学校教育法をはじめとした、いわゆる教育三法が改正され、同じく昨年11月には、中央教育審議会の教育課程部会から「審議のまとめ」が公表され、新しい学習指導要領の基本的な在り方について示されたところであります。

このように、国におきまして、次代を担う子どもたちを育むための様々な施策が打ち出されているところでありますが、札幌市におきましても、昨年12月に取りまとめました、19年から22年までの4年間の計画である「第2次札幌新まちづくり計画」におきまして、「未来を担う子どもが健やかに育つ環境の充実」を、重点課題の一つに掲げまして、自ら考える力や、思いやりと豊かな心を育むための取組を実施することとしているところであります。さらに、子どもの相談体制の強化や、学びの意欲を育てるなど、子ども達が人格の形成にむけて、のびのびと成長・発達していける教育環境の充実を、学校、家庭、地域社会がそれぞれの役割を果たしながら、連携して推進することとしております。

また、高等学校教育に関しましては、平成15年2月に策定いたしました「札幌市立高等学校教育改革推進計画」に基づき、引き続き、魅力ある市立高校づくりを推進いたしますとともに、今年4月には生徒の学習ニーズの多様化に柔軟に対応するために、市立高等学校4校の定時制課程を発展的に再編し、午前・午後・夜間の三部制や単位制を取り入れた市立札幌大通高等学校を、開校することとしており、平成22年には新校舎も完成する予定となっているところでございます。

結びになりますが、本研究会の研究主題であります、「新しい時代を切り拓く高等学校教育の創造」を実現するためには、今日お集まりいただいた皆様一人一人の教育に対する情熱と着実な教育実践が必要とされている訳でありまして、皆様に

対する期待は非常に大きなものがあると考えております。

本研究会の成果が、札幌市はもとより、これからの北海道の高等学校教育の指針となりますようご期待申し上げますとともに、本研究会が今後ますます充実・発展されるよう御祈念申し上げまして、ご挨拶といたします。

## 挨拶

北海道高等学校長協会

会長 小原信夫様

皆様新年明けましておめでとうございます。皆様にとって麗しい1年の幕開けとなり、お一人お一人が新年の抱負をお持ちになられたことだと思います。

1年のスタートが、全道各地からこのように多くの方々が参集され、互いに研修し合うことで始まるということは実に素晴らしいことだと思います。本道の先生方の意欲の高さを証明しているものだと思います。

本道の高等学校教育は、このような皆様方の意欲と熱意に支えられ、子どもたちは目標に向かって一日一日着実な成長を遂げ、自己の可能性への変容を成し遂げています。

しかし、課題がないわけではありません。本道でも、高校生が肉親や友人の命を奪うという事件が2年連続して起きました。また、国際比較から日本の高校生は自分に自信がなく将来に希望を持ってないということも指摘されています。特に、ユニセフによる15歳対象の先進国調査では、「学校で孤独を感じる」日本の高校生は30%の数字に上り、先進国平均の実に4倍にもなっているのです。「学校で気まずさを感じる」数も先進国最多なのです。ほぼ3人に1人の高校生が、学校を居場所としていないのです。

子どもたちに自信を持たせ、心の安住の場をどう保証してやれるのか。私たちは今までの教育の成果に自信を持つと同時に、社会の変化の中でたじろぐ子どもたち一人ひとりとどう向き合うかについて一層の研修を深め着実な歩みを進めていくことが必要です。学校の教育活動から取り残され

ている子どもや誰の手も届いていない子どもがいないかなど、子どもたち一人ひとりを支援し導く教育活動を学校全体として推し進めていかなければなりません。

特に、高等学校の教育活動の中心である学習活動において、子どもたちに自信を持たせることを教育活動の基本に据えることが極めて大切なのだと思います。学習活動に意欲を持てる子どもたちを育てていくことは、高等学校教育の最も大切な責務であります。

ユネスコが1996年出した「学習－秘められた宝」で、21世紀の教育の在り方として4つの基本が掲げられています。「知ることを学ぶ  なすことを学ぶ  共に生きることを学ぶ  人間として生きることを学ぶ」です。学力とは単なる知識の習得ではなく、ここに示された力を育てることが学力の向上であることは、私たちが今までの教育の中で目指してきたことと一致することは言うまでもありません。

また、学力の向上とは、知性を磨き育てることだとも言われています。

「知性は葛藤からしか芽生えない」「知性は体や無意識を含めて考える総合的なものである」から、「自分と正反対の価値観や思考にさらされる機会を持つこと」「物事の意味をもたらす生の体験を大切にすること」「自分というものが分かるには社会と対峙できなくてはならないこと」が、脳科学者（茂木健一郎、養老孟司）哲学者（鷲田清一）経営コンサルタント（波頭亮）など多くの人によって語られています。

葛藤や体験、他人や社会とのぶつかり合いから、自信や夢が生まれるとしたら、学習活動というぶつかり合いの中でこそ子どもたちは元気になるのではないか。

今私たちが、今まで進めてきた教育に自信を持つと同時に、工夫、改善しなければならないことは、一人ひとりの子どもたちにどう焦点を当てて迫っていくのかなのだと思います。一人ひとりの日々の学習活動を適切に把握すること、そこから一人ひとりにあったプログラムをたてて指導し援助していくことが、子どもたちの自信と元気を取り戻すためにやらなければならないことです。

多くの先生方が先進的な取組をしています。この輪を広げるとともに、学校体制としての取組を進めていかなければなりません。

この意味で、この二日間の研究大会が、研修意欲を一層高めるとともに、お一人お一人の今年の研修・実践のヒントとなることを願っております。また、全国的にも優れた組織である本研究会にさらに多くの先生方が参加し、北海道の高校教育が一層の充実するために、この成果を広めていただきたいと思います。来年の本研究会がより多くの参加者の結集により、我々の研修こそが子どもたちの成長を支えるのだと言うことを示していただくことを願っております。

この研究大会の運営に当たられます札幌旭丘高校の皆様を始め、ご尽力なさいました多くの皆様のご苦勞に報いるためにも、是非充実した大会にしたいものです。

最後になりますが、お集まりの皆様のご活躍と、ご健康を祈念申し上げます。

# 全 体 講 演

〔演 題〕

## 「ニュースの嘘と教育」

慶應義塾大学 経済学部教授

金 子 勝 氏

はじめに

今日お話しする内容は以下の4つである。

① メディアの手法

本当の情報が流れてこないうちに事態が進んでしまうことに対して、情報を正しく捕らえること。教師として、嘘を見抜く力を自ら示せるかどうか大事である。

② 自分たちはどういう時代に生きているかを語る

今、どういう時代に生きているかわからないで説教ばかりしていても説得力がない。

③ 現実と向き合って言葉の力を取り戻すこと

自分の語っている言葉に力があるのか。現実と向き合っているのか。

④ 生きるモデルを示すこと

若者は将来に不安を持っているが、この社会の中でモデルになる生き方をしている人を紹介できない。今の状態では、何を学んで何を身につけたら自分にとってプラスになるのが理解できないので、多くの子どもたちが簡単に高校をやめてしまう現状がある。

この4つが我々にはできているのかどうか、言いたいことを挟みながらお話ししていきたい。

### 情報のコントロール

正しい情報を流さないメディアの情報操作は今もたくさんあるが、それがメディアコントロールではない。人が食いつく、視聴率がとれる「つくり」を予め読んで、政治側がイベントを打ち込んでくる。露骨な介入ではなく、メディアが流すであろうやり方を熟知して操作をする、メディアを利用する「メディア政治」というやり方が出てきた。普通の人共感できる手段は決まっている。簡単なのは「単純化する」「ずらす」「たたく」「繰



り返す」の4つである。メディアには2つのタイプがある。映像メディアは、瞬間的に流れてくるものであり受け手が止められないので、見ている側は受動的になってしまう。それに対して活字メディアは、論理的であり、書き終わった後は読者側に主導権がある。つまり、繰り返して読もうが、ゆっくり読もうが、どう考えて読もうが、主導権は読者が持つのである。そして、情報を選ぶ時間もある。映像メディアの特徴として、インパクトはあるが複雑なものは全く伝えられないので、情報が単純化されてしまう。確かに一番単純なのは白黒をはっきりさせることであるが、現実はそんなに単純なものではないだろう。しかし、「たたく」「繰り返す」で単純化させて感情に訴えるものでなくては、視聴者は食いついてこない。そして、単純なメッセージを「繰り返す」と強いイメージになり、感情的なものに入っていき「刷り込み」になる。そのため、映像メディアには、一つのメッセージを夥しい数の人に伝える能力がある。それに対し活字メディアは、論理的な情報は伝えられるが、深い情報であればあるほど範囲が狭くなってしまいうという欠点がある。

社会では「悪」のイメージを拵えておいて悪を「たたく」、都合が悪くなると論点を変え違う話題を持ち出して話を「ずらす」など、これらを巧みに利用して政治が行われている。何か標的をつくってたたくことで、物事の本質は問われなくなるのである。

## 時代を語る

このようなメディアが横行する時代では、我々は嘘を見抜く力を求められる。正しいことを教えるということは、教える本人が嘘にだまされているという説得力がない。教員の簡単な一言が、生徒にとっては大きな影響を及ぼすこともあるのだが、その時に、「今」の時代について正しく語ることができる教員がどれだけいるだろうか。我々が生きていた時代の価値観・倫理観を今の若い人に話しても、何の説得力もない。自分の過去の記憶を、違う考えを持った若い世代に押しつけていることが知らず知らず存在する。我々は「変化の中に生きている」という感覚を持たなくてはならない。世の中は常に変化しているものである。

今、世界は「軍事」「エネルギー」「通貨・金融」の3つを基軸にして、大きな転換期にある。この3つは、世界を支配するために最も重要な要素である。19世紀のイギリスが世界を支配した時代、イギリスは圧倒的な海軍力を持ち、石炭と蒸気機関を持って織物工業を盛んにし、金本位制をバックにポンドを世界通貨とした。しかし、この体制が20世紀にはアメリカの挑戦によって崩れてきた。アメリカは圧倒的な空軍力、石油に基づいて産業を興し、ドルを基軸通貨にしていった。この3つの要素が、今、70年代のオイルショックに始まり、90年代の社会主義体制の崩壊などを引き起こし、アメリカはその地位を後退させている。イラク戦争の失敗により、圧倒的な軍事力を持ってしてもそれだけではアメリカは世界を支配できないことを白日の下にさらしてしまった。この影響でイスラム圏全体の不安定化が避けられない状態に入っており、これは石油エネルギーの価格を上昇させる要因になっている。石油エネルギーはもう限界に達しつつある。BRICsの成長に見合うだけの大油田がなく、とても賄える値段ではない。先は読めないが、景気が後退しても石油価格の上昇は止まらないだろうという予測が強まっている。これは、サブプライム問題等の通貨・金融問題にも重なってくる。今、ヨーロッパは急速に自然再生エネルギーにシフトし、アメリカに挑戦してきている。通貨ではすでにユーロでアメリカに挑戦しており、ヨーロッパはアメリカにとって大

きな脅威となりつつある。我々は、これから始まる大きなバブル崩壊により、今まで進めてきたグローバルスタンダードといわれるものが脆くも崩れていくのを目の当たりにするだろう。アメリカの金融機関は今やITバブル崩壊後のエンロン状態で、アメリカの会計基準は崩壊している。アメリカ経済の一番の問題は、石油価格が上がりながら不況になっていることである。

世界を市場でフラット化すれば、グローバルスタンダードの元に世界経済は良くなっていくという議論は、気が付けば、石油の在庫の7割は7つの国営会社（新セブンスターズ）が持ち、300兆円以上のお金を動かしており、世界の金融市場を政府系ファンドが牛耳っているという、不思議な現象が起きてしまっている。シティグループ、モルガン、メリルリンチなど世界の中心にあったアメリカの金融機関が、これら国営ファンドに救済されるという状況に変わってきている。「ある原理に従って追求していくと、その原理とは正反対に行き着く」という事態が進んでいる。時代の変わり目というのはそういうものである。目先しか見えない人間は、尚も昔の原理で説明しようとするが、昔の残像では今の時代に合わない。

話はいろいろ飛んだが、「軍事」「エネルギー」「通貨・金融」の領域で大きな転換が起き始めている。しかも、ある原理を追求すると逆の原理に行き着く。ある原理を「常に真理だ」と教えられることは少ない。ましてや時代の変化を読むときには複数の考えがあり、それらが競い合っているのが健全な社会である。イラク戦争から世界の構図は大きく変わり始めていて、「軍事」「エネルギー」「通貨・金融」で大きく世界を見ていくと、世界の流れは急激に変化している。今、ヨーロッパは「エネルギー」「通貨」に関して戦略的に打って出てきており、世界は大きく変化する多極化と不安定の時代に入ってきている。そうすると、我々はどのような社会を構成してよいか分からない、不安定な時代の中で方向感覚を失いがちになる。その中で、時代を読みながらいかに未来を語りうるか。新しい社会の中で、環境エネルギー政策や教育による新しい付加価値や開かれた都市政策によって多くの優秀な頭脳を取り込む都市の能力などが大



きな焦点になっていくだろう。時代の大きな流れを読むと同時に、我々は、どこに新しい社会を構成する基軸があるのかを積極的に語らなければならない。ただ時代の変化を傍観するのではなく、いかに我々が生き残っていくのかを明確に語ることができるかどうか大きな要素になっていくだろう。

### 現実と向き合って言葉の力を取り戻す

これが私たちにとって重要である。抽象的な言葉を説教のように語るのが、一番説得力がない。知らず知らずに我々は、ある価値を守れということを行っている。しかし、今の世の中で永遠に現状維持では、若者には何の未来もない。不安定な、未来のない状態におかれた人間が、社会の今ある価値を守ることに納得するのか。私たちは、革新者、社会の新しい価値の創造者でなければいけない。古いものを守るための説教者であれば、教師は自らの命を縮めることになる。もし憲法九条を問題視するのであれば、憲法を「守る」か「変える」か以外にも「使う」「生かす」など様々な動詞があり得るのに、我々は今のメディアの単純な二分法に巻き込まれ、他の動詞を失っている。と同時に抽象的な議論の背後にあるのは、現実のリアリティを失うことである。例えば、経済財政諮問会議が今年の5月に農業政策の中間取りまとめを出し、政策の柱は3つあったが、実際には現状にそぐわない政策ばかりである。そういう馬鹿な政策をして、農家の反発を買って参議院選挙でボロボロになったにも関わらず、政策を根本的に転換しないで違うことをやって選挙の対応に追われている。言葉を抽象的に議論する前に、行ったことも見たこともない人たちが立てた政策の減茶苦茶ぶりを、現実求めてこれでやっていけるのかという言葉の強さを、私たちは現実によって取り戻さなければならない。年金問題も、今の延長上で現行の制度を元にしても、もう未来はない。新しい年金制度を作って旧年金を緩やかに消滅させていくべきである。いろいろな議論をしているところで、本当に当たり前のことをリアルに考えてないから、言葉に力がない。医療問題はもっとひどい。どんどん病院から医者がいなくなり、診療

報酬が何度も切り下げられている。地方の自治体病院はやっていけなくてどんどん潰れている。医療難民や、保険証を取り上げられて病院にかかれない人も増えている。貧困が貧困を生み、現実には国民の健康で文化的な最低限の生活も維持されていない。人が生きていけない現実があるのに、皆保険を語っていていいのだろうか。現に起きていることと言葉が乖離している、解決しなければならない問題がある、ということを引きちんと言わずに教育と呼べるのか。私たちはもっと言葉で噛み締めない限り、いくら説明したところで何の説得力もない。起きている社会は矛盾だらけだが、起きている現実には身を投じ向き合うことによって初めて言葉に力が生まれるのである。ネットカフェ難民についても様々取り上げられているが、ネットカフェ難民という言葉にあるリアリティを持たせるには、なぜそこに至ったのかという現実と向き合わない限り、そしてその根源には多くの高校生たちが就職するときに直面するのと同じ問題が潜んでいる現実にとどり着かない限り、言葉に力は出てこない。ただ感情を刺激するのではなく、生きた現実と向き合って言葉に力を持たせるということ、私たちがどこまで語れるか。そのためには、私たち自身が現実を見なくてはいけない。私たちは、現にある問題を解決するために学問をし、教育をし、教育を受ける。そういう元々の動機がそこにあるはずなので、そこに立ち入らないで何のために学ぶのかと言っても説得力はない。

### 生き方のモデルを示す

最後に、でもそういう現実の中でも必死にしっかりと生きている人たちが存在するという事実を私たちが自身が見つけなければならない。リスクは大きく、困難は大きいけれど、絶えずその困難を防ぐために人類は前に進んできた。戦争の結果、普通選挙権が生まれ、福祉国家が生まれ、様々な災禍を教訓にして新しい仕組みをつくってきたのである。私が農村を回っているときに思ったのは、そういう最後尾に実はすごく頑張っている人たちがいて、しかもその人たちは謹厳実直に頑張っているというよりは、むしろ楽しく生きているのである。誇り高く生きている、そういう人

たちが、有機農業について常に新しい付加価値を作り出している。農業は今「化学」している。新しい化学に変えることによって、農業そのものを変えていくのである。有機農業は、昔に戻ったり反近代ではない。先頭にいる人たちは、すべて勉強している。あらゆる仕組みを学び、あらゆる工夫をしている。そういう誇りの高い新しい価値を創造する人たちの中に、私は一つの人間の生き方のモデルを見いだして励まされる。

ボブディランの歌にかつて『時代が変わる』というのがあったのだが、その中の一節に「のろまなものはやがて素早いものになる。秩序が崩れ、現在はやがて過去になる。先頭にいたものはやがて最後尾に行き、最後尾にいるものがやがて先頭に立つ」という歌詞がある。私たちは本当の意味で開き直っていない。社会を再生するということは、大地からの再生である。私たちは一からやり直さなければいけないとしたら、大地から再出発するしかない。最後尾にいるものはやがて先頭に立つという夢を持って、最後尾である中山間地において、金儲けをバンバンしながら新しい価値を作り出している生き生きとした人たちが存在している。決して楽な仕事ではないが、そこで時代を切り開いている人たちがいる。そういうことを私たちはもう一度思い起こす必要がある。北海道経済は苦しいけれども、その中で苦闘している人たちの中にも、そういう新しい価値を何とか実現しようと努力している人たちが数多くいるはずだ。その人たちこそが、次の時代を担うことができるはずだし、できるだけ多くの若者にそういう精神を持ってもらえるように励ましていくことが私たちの役割ではないか。そう考えると、生きるモデルを提示することは、最後尾にいる人がやがて先頭になるということを夢見ている人たちの姿を見せることではないか。

夢ということでもいつも私が思うのは、1960年代半ばにキング牧師の「I have a dream」という有名な演説があるが、これがなぜ公共性を表すのか。私的な個人の利益を越えている、時間も空間も越えているからである。夢という言葉はなぜ夢なのか。実現しないかもしれないからである。実現することしかしないなら、それは夢ではない。私た

ちはそういう意味で、夢のない給料10%カットという状況の中で、教育に未来を持たせるために、私たち自身の夢というのを見いだしていくことが必要である。『人生努力すれば必ず報われる…こともあれば、報われないこともある。』

## 第二日・教科部会

### ●国語部会 .....

#### 〔講演要旨〕

#### 「『古典』をつくる」

作家 橋本 治 氏

私の高校時代の古典の授業は、「(教師が生徒を指名して) 読め。訳せ。」という授業で、古典の授業は嫌いでした。「桃尻語訳枕草子」という本を書きましたが、高校時代に古典の授業が嫌いだった私が高校教育を否定しようとして書いた訳ではありません。私にとって古典は、講談や絵本の影響だと思いますが字よりも絵でイメージするもので、女が漢文をできなかつた平安時代の女流文学は現代の少女漫画のようなものではないかと考えたからです。「桃尻語訳枕草子」がNHKのニュースで取り上げられ売れてしまい、「枕草子」に匹敵する受験アイテムの「徒然草」を同じように書かないかという話を出版社から頂き、「絵本徒然草」を書きました。執筆しながら、古典というものを本当はどういうものか皆わかってないんじゃないか、このままでは日本人が皆古典を読めなくなるんじゃないかと思いました。現在とは、過去の集成であり、色々なものが取捨選択されて現在がある訳で、古典は捨てられたものの宝庫です。例えば枕草子は、平安時代を知る事典だと言えます。古典には、今日使われていない言葉や分からないことが沢山出てきます。社会が教育に求めていることは、分からないことを分かるようにすることではなく、分かるとは違うもう一つの選択肢を認めることだと私は思います。困難とはこういうものだというのを教えることが、教育ではないでしょうか。古典を読むと、今まで気がつかなかつたことや思いもよらなかつた考え方が出てきます。こういうことがあってもいいというもう一つの選択肢のために、私は古典が必要だと考えます。

#### 〔研究協議〕

#### 主題「ことばと生きる」

一心を豊かに 思いを確かに一」

#### 〔研究発表〕

#### 「視覚効果を活用した古典学習指導の試み」

遠別農業 樋口 かおり

留萌管内唯一の農業高校。農業後継者以外の生徒が殆どで地元高校との意識が強い。多様な生徒の実態や進路希望に応じ、一人一人の学力にあったきめ細かい学習指導に全校で取り組んでいる。

国語科でも生徒の学力の実態を分析し、指導内容の重点化ならびに評価観点の重点化を図って実践した。

今回は古典に親しむ態度の育成と個別指導の効率化を目標とし、一斉、グループ、個別と学習形態も目的に応じて多様に組むようにした。漢文の授業においてプレゼンテーションソフトを活用した個別学習システムを開発して実施、またコンピュータのチャット機能を活用しての読解授業などにも取り組んだ。

#### 〔研究発表〕

#### 「『授業規律の確立』から『授業の改善』へ」

南茅部 江尻 巧

ここ数年間にわたり「授業規律の確立」に取り組んできた。多くの研修機会を持ち、全校体制で取り組んできた結果、落ちついた学習状況が見られるようになったが、規律によって成立させる授業でなく、「わかるから、楽しいから」学ぶという授業をさせることが次の課題となった。そこで、シラバス配布の導入や朝読書、生徒による授業評価の実施など、さまざまな取り組みをしている。

国語科でも国語力の伸長をめざして実践を重ねている。国語表現では、携帯電話の会話のやり取りで、道案内をする授業や、新聞記事をもとに意見文を作成する授業、生徒が設定した問題でディベートを行う授業等を行い、生徒の表現力や、語彙、考える力を伸ばそうとしてきた。生徒の学ぶ喜びを感じさせるため、教員が「仕掛け」を工夫することが求められていると思う。

## ●地歴・公民部会 ……………

### ■世界史部会

#### 〔講演要旨〕

#### 「北魏胡族体制論」

北海道大学大学院文学研究科

助教 松下 憲一 氏

4～6世紀に中国華北を支配した北魏の国家体制を、鮮卑拓跋部による支配体制からせまる。

通史的理解では、北魏は部族制を解体して積極的に官制・礼制など漢化政策を導入し、遊牧的伝統を自ら放棄した王朝とされ、遼金元清の征服王朝と区別して浸透王朝と呼ばれた。しかし、諸制度の運用原則において遊牧的伝統を引き継いでいる面も無視できない。ここではそれを「部族解散」と「代人集団」から考えてみる。

鮮卑拓跋部に対抗する他部族の征服が「部族解散」であるが、その際征服して拓跋部へ編入するだけではなく、部族長が降伏してきた場合は、部族を解体するのではなく、領民酋長などの官職に任じ、定住させて部族を管理させた。そしてもともとの部族の枠を取り払い、拓跋部の可汗（リーダー）と個人的に結びついた集合体を創設し、これらに「代人」という統合原理を与えて、北魏の支配者集団「代人集団」を形成した。この「代人集団」は、北魏から隋・唐にいたる諸王朝の支配者層の淵源となる。この「代人」の意識は、漢族にも及んでいたことを示す事例があることから、胡漢の枠を越えた支配層の形成をめざしたものと考えられる。

このように北魏の国家構造は胡族による支配体制であり、また北魏をへて唐にいたる国家は、支配層の継続性・共通性から見て、連続した部分を持つ。

#### 〔研究発表〕

#### 「海外研修からとらえる授業展開について」

真狩 高 雅彦

はじめに真狩町の自然や地域の特徴、真狩高校の概要について話をした。次に今まで実施していた香川県への農業実習が困難になったため上海へ海外研修に行くようになった経緯を話した。上海についての歴史特にアヘン戦争時代の租界を中心

に事前学習、事後学習を行なった。反省として世界史の授業が三年次にあるため終わってから事後指導までの期間が長かった。また保護者からの反日デモや中国産の食糧などに関する不安の声などもあった。しかし結果的には生徒は若者同士の交流や異文化をしっかりと受け入れていた。

#### 〔研究発表〕

#### 「記憶の歴史学と世界史の授業」

剣淵 本間 靖章

はじめに剣淵高校の概要、本校生徒の特徴や問題点を説明した。生徒が世界史への興味関心の弱さを克服し、主体的に授業に取り組むためにピエール・ノラの『記憶の場』を授業で応用した。ピエール・ノラについての説明の後、どのように授業で応用されたかを説明した。従来の「原因」から「結果」を考察するのではなく、「結果」として現代社会に存在するものを分析する。歴史が「生きたもの」として、生徒の興味関心を引き出せるようになった。問題点としては進度との兼ね合いを取らなければならなかった。

### ■日本史部会

#### 〔講演要旨〕

#### 「国民国家と古都奈良・京都」

京都大学人文科学研究所

准教授 高木 博志 氏

「古都」「文化財」の語は第二次大戦後に定着した。19世紀後半、ヨーロッパ列強はギリシャ文明の継承者であることや独自の国民文化を誇示した。同時期、日本では奈良博覧会を開催し、正倉院宝物をはじめ、書画、古器物等を陳列し17万人余の観客を集めた。また、全国規模の宝物調査を開始し、東京美術学校の設立、岡倉天心による日本美術史の編纂が開始されるなど独自の美術文化が形成された。

今後は、飛鳥・白鳳・天平文化についての文化史時代区分論についても検証していきたいと考えている。

〔研究発表〕

「地域巡検を活用した授業の取り組みについて」  
上ノ国 紀伊國 薫

上ノ国から始まる和人の歩みを、松前、江差の歴史を含め、あらためて自らの手で外側から地域を見つめることで「ふるさとを豊かに語る力」を身につけさせる授業実践を示した。今後は教科学習との連携が課題である。

〔研究発表〕

「興味・関心を高めるための教材開発について  
―自校史の活用を中心に―」

札幌東 相庭 達也  
モノ教材や自作教材を積極的に活用し、生徒が興味・関心を持てる実践例を提示した。自校史の教材化を通じて、生徒による調査、研究の効果と活用について示した。歴史教育の目的や目標を明確に意識していきたい。

■地理部会

〔講演要旨〕

「世界遺産知床の生態系とその保全」

斜里町立知床博物館  
館長 中川 元 氏

2005年7月「知床」が世界自然遺産に登録された。世界遺産とは「顕著にして普遍的な価値をもつ人類共通の資産で、過去から引き継がれていくべき世界の宝物」とされており、183カ国が「世界遺産条約」を批准し、各国政府が推薦する物件は毎年開催される「世界遺産委員会」で審議・決定され「世界遺産リスト」に記載される。2007年7月現在、世界遺産登録件数は851件、内訳は文化遺産660件、自然遺産166件、複合遺産25件である。

知床は自然遺産の登録基準4項目中の2項目「生態系」「生物多様性」を満たしたことで登録が実現した。知床半島は資源豊かな海に囲まれ海洋生態系と陸上生態系とが密接につながりあって複合生態系を形成している。さらに知床の海は世界で最も低緯度にある海水域である。アムール川からオホーツク海にもたらされる豊富な栄養分と流水のメカニズムによって流水下の海では植物プ

ランクトンの大増殖がおこる。これをきっかけに動物プランクトンや甲殻類等の無脊椎動物を育み、それらを餌とする魚類や海鳥類、さらにはそれらを捕食する動物たちが息づいている。特にオホーツク海は外海と隔てられた湖的な存在であり、生物多様性の自然環境は世界的に見ても注目され「特異な自然体系」を織りなしている。現在はこの生態系をいかに保全していくかを専門家・行政・地元住民が一緒になって検討が進められている。

〔研究発表〕

「生徒と歩いた軍都・月寒（歩兵第25連隊跡を中心に）」

～「身近な地域の調査」に関わる

野外巡検の実践例～

札幌月寒 鈴木 良伸

地域の教材化を元に地域調査を実施。特に日本陸軍史跡を扱っていく事によって地域の特性が浮き彫りになった。使用教材も新旧地形図を重ね合わせ、時代を経た数枚を比較させることによって、過去と現在が具現化し地域が鮮明になっていく。また野外巡検を実施し、生徒にも実際に足を運ばせ1時間という時間制約の中ではあるもののフィードバックも含め、進学校でありながらもフィールドを大切に、生徒の視線で着目させ、実際に現地へ赴くことによるのみ知りうる情報の取得方法などを実践を交えての地理の授業の大切さを学ぶことの出来る研究発表であった。

〔研究発表〕

「地域の素材を使った授業と評価問題例」

室蘭栄 芳澤 文明

写真や図式等資料に頼りがちな「地形」を扱う授業の中で、生徒が日常生活で見慣れた景色の中から地形教材をピックアップし、必要に応じてデジカメ映像として教室内で提示する。身近な地域素材であるだけに生徒の意欲は喚起され、教室が活気づく、さらにそれらが十分な教材である。普段の生活をいかに授業の中で活用しさらに生徒の地理的な見方、考え方を醸成するかという授業作りのヒントをいただいた。評価問題例では地域の

地形図を用いて発問されるものもあり、授業での内容が問われている。「地域から世界へ」地理の世界を広げていく手法はデジカメが一般化した今、授業づくりにも非常に有効な手段であることに気づかされる研究発表であった。

## ■現代社会部会

### 「証券取引と金融市場の役割」

日本証券業協会NPOエイプロシス

増井 利光 氏

サブプライムローン問題と景気の循環的な中だるみを要因として、3年ほど上手くいっていた世界経済見通しに変化がみられる。米国で民主党政権が実現すれば、保護主義的傾向になり、米中の間で貿易摩擦の可能性もある。大企業を中心に景気回復傾向にある日本だが、今は踊り場を迎えている。今後中国にはサービス分野で進出すべきであり、日本経済にとってはサービス分野での労働生産性向上が景気回復に向けた重要な課題と言える。

## ■倫理部会

### 〔講演〕

#### 「病むこと、回復すること

#### ～精神障害を持つ若者の支援から見えてくるもの～

北海道医療大学看護福祉学部

教授 向谷地 生良 氏

「精神障害とは、一人の思考、感情、気分、他者との関係を持つ能力を阻害し、生活に必要な事柄に対応させる能力をしばしば低下させる状態である」と定義づけられる。精神障害は脳病ではなく、人と人との関係の中で起こるのであり、人と人との関係の中で回復する。従って「関係」を提供することが非常に重要となる。ストレスや困難あるいは不安のある子が、あるきっかけでコントロールを失うと精神障害として現れるが、コントロールを取り戻すことで回復する。そして、精神障害という困難は、その人の経験にそれを乗り越えるヒントが隠されている。

精神障害を体験した回復者と障害をもった当事者が様々な事業を展開している「べてるの家」の取り組みは「関係の取り戻し」というプログラム

としての起業である。精神障害の子供達に、人との「関係」を回復することで障害を克服させることができるという。解決の主役は本人である。本人達で乗り越える場を失わせてはいけない。自分の弱さを隠さず、マイナス面も含めて気持ちを話す、弱さを出すチャンスを用意することが回復を可能にするのである。

今後は障害の回復ばかりではなく、予防的な役割を果たしていきたいと氏は語る。

最後は、心の病をもつ生徒の対応を中心に、活発な質疑応答が行われた。

### 〔研究発表〕

#### 自ら学ぶ意欲を高める倫理の授業展開

#### 「教室で生命倫理を教えてみよう

#### ～現代倫理学の授業実践」

札幌創成 渡辺 祥介

はじめに発表者によって生命倫理が扱う問題領域について、生命倫理学の歴史的背景と絡めながら説明が行われ、現代の生命倫理におけるアクチュアルな問題に対処する私たちの倫理的規範の追求がなされた。そして生命倫理に関する社会的合意を追求した場合、規範の理論の思想的源流は先哲のカントや功利主義、アリストテレスの思想にたどり着くことが確認された。なかでもベンサムやミルにおける功利主義の「結果主義」や「効用主義」、カントの「義務論」、アリストテレスの「徳倫理」が中核をなすものであり、それぞれの長所・短所を明確に批判しながら倫理規範の確認がなされた。現代の規範倫理学が準備したこの3つの「道具」と絡めた日頃の発表者の授業実践から、高校生が自らこれらの理論の限界点などを追求した具体的な報告がなされた。一方近年は従来の生命倫理学の理論的枠組みでは対応できない多くの事例が存在し、クローン人間や遺伝子治療、臓器移植など「前例のない事例」の倫理的是非を判断するために、現代人はどのように社会的合意を図っていくかという問題が提示された。この分野が高校教科書においても「課題追求型」として扱われている理由がここにあると示された。そこで後半「前例のない事例」ケーススタディ（ケース例4課題）を出席された先生方に提示し、授業

さながら活発な議論が展開され、倫理的是非をめぐる社会的合意を図る合理的な思考のトレーニングの必要性が確認された。

## ■政治経済部会

### 〔講演要旨〕

#### 「企業社会で求められる能力

##### ～マネジメントの基礎理論と実務への応用～

北海学園大学経営学部

准教授 田中 史人 氏

北海学園大学では出前講義として高校生に向けて授業を行っているが、その中で生徒自身が自分は何に興味を持ち、何に対して問題意識を持っているのかを大切に考える機会にしてほしいと考えながら授業を行っている。そもそも、大学生を見てもどんな企業があり、どのような仕事をしているのかをあまりにも知らない。偏差値で学部を選んでしまう傾向が強いが、自分のキャリアを重視し、その上で何を身につけるべきなのかを考える一つのきっかけとして欲しい。

企業で求められる能力とは、実務遂行能力つまり、知識だけでなく、それを実際の現場で使いこなせる力と、ビジネスプランを立案し、それを実行していく能力である。例えば、戦略思考力や事業構想力、論理思考力、情報収集力などのさまざまな能力があげられる。実際の職場で働く人たちが、具体的に仕事のどんなところに打ち込み、どんな点に気をつかい、自分の仕事についてどんな思いを抱いているのかを、TV番組を教材（今回「あしたをつかめ 平成若者仕事図鑑（NHK教育）」を視聴）として利用することで、必要な能力について理解させる手助けとなるだろう。

経営戦略やビジネスプランについても話をするが、高校生に対する実際の出前講義では、内容のすべてを消化できるわけではない。出前講義だけでなく、連携しながら「次のキャリア」に興味を持たせていきたいと考えている。

## 〔研究発表〕

### 「調査・発表を通じて社会人としての経済的資質を養う」

苫前商 江尻 憲昭

自分の考えを人に伝えられる人間の育成、これからの社会で生きていくために必要な経済感覚を養いたいと考え取り組んだ。主な学習活動は「題材選び」「調査」「発表準備」「発表」「外部講師講話」である。グループでの活動とし、話し合いによるコミュニケーションを大切にしたい。また、実生活とリンクさせて題材を選ぶことや、伝えたいことを明確にした発表を行うよう指導した。今後の改善点は多々あるが、社会人としての経済的資質を養うことは概ねできたと思われる。

## ■現代社会部会

### 〔研究発表〕

#### 「コーチングを利用した教科指導」

豊富 山崎 辰也

コーチングの考えを利用して、「目標から逆算した授業の組み立て」「論理的思考力・表現力を引き出す」授業を実践している。授業は目標達成のためのトレーニングの場とし、生徒自身に頭を使わせ考えさせるためにワークシートを活用。生徒の出した思考・判断をつぶさないよう、また教えすぎないように注意している。生徒の「どうして」を逃さず、個人の変化を大事にしている。今後は、生徒自身に目標設定させるためのアプローチの方法を、コーチングの手法から考えていきたい。

## ●数学部会 .....

### 〔講演要旨〕

#### 「これからの数学教育について」

東京理科大学数学研究所

所長 澤田 利夫 氏

##### 〈これまでの数学教育について〉

ゆとり教育は「ゆとりと充実」⇒「新しい学力観」⇒「生きる力」と流れてきており、総合的な学習の時間の新設・学校5日制等行なわれてきた。

##### 〈学力低下論争について〉

80年代から始まったゆとり教育の結果として学力低下が教育界の中心話題である。

国際調査（IEA、PISA）・国内調査（文科省）の結果、学力は国際的に見ると上位ではあるが読解力は低下傾向にある。学ぶ意欲や学習習慣・活用力・応用力に課題がある。授業以外の一日の学習時間は「3時間以上勉強する」と「まったくしない」の両方とも多いことが学力の二極化を生んでいるのではないかとされている。

#### 〈新学習指導要領について〉

中学校は従来「数と式」「図形」「数量関係」の3領域であったが、「数と式」「図形」「関数」「資料の活用」の4領域に変更され、統計分野を復活させる。授業時数も中1・中3で1時間ずつ増加する予定で、現在高校で履修している分野がいくつか中学校に復活する。

高等学校は、数学的活動をいかした指導を重視した「課題学習」の指導が行われるようにすること、根拠を明らかにし筋道を立てて体系的に考えること、言葉や式、図、表、グラフ等の相互の関連を理解することが要求される。

#### 〈これからの数学教育に望むこと〉

「数学Ⅰ」は、国民必修の数学と言う立場で、微積分の考え方・統計的な考え方が身につくように再編すべき。高校1年生を中学4年生として位置付け、以後の数学と区別すべきである。

関数概念を高めるために関数領域を新設しグラフ、表、式の関係を一体的に捉える。

最後に、日本の教師の指導スタイルは世界でも評判が高い。フィンランドでは日本の教育を真似て、カリキュラムを導入し、成果を挙げている。先生を優遇することにより先生の質は上がる。

#### 〔研究発表〕

##### 「礼文高校数学科の実践について」

##### ～小中高連携と授業の工夫・自己評価～

礼文 小山内 義輝

小中高の枠や学年を超えて、豊かな人間関係育成の機会を作り、礼文版基礎学力検定問題を実施し学力向上を図り、学校間のみならず、町の教育関係団体との協力体制を作り上げた。

##### 「暗算で何曜日かわかる」

##### ～カレンダーの数学～

留萌 木村 尚士

両手のひらと、指の節を用いて計算をすることによって、曜日を求め、生徒に数学の楽しさ、便利さを体験させ、数学の有用性を実感させる実践を行った。

##### 「学校は勉強するところだ」

##### ～わかる授業で教育困難校を立て直す～

美瑛 浪岡 知朗

授業が楽しければ学校が楽しいという基本的な考えを大切に、厳しさと同時に、生徒の声を聞き、学ぶことの意味を日々の実践の中で積み重ねた。

##### 「数学のメガネで現実の世界を読み解く」

##### ～タコ箱漁オーナーと確率～

札幌新川 清水 真人

授業作りの中で、タコ箱漁オーナー企画を通して、確率や期待値を求めさせることにより、数学の楽しさを再発見させるだけでなく、地域・社会に目を向け、数学的リテラシーを身につけさせる。

#### ●理科部会 ……………

##### 〔全体講演要旨〕

##### 「ハンガリー出身の天才科学者たち」

東京工業大学大学院社会理工学研究科

准教授 中島 秀人 氏

ハンガリーは中欧の小国であり、人口は約1千万人である。その首都ブダペストは、もともとはローマの属領都市であった「ブダ」と「ペシュト」という2つの街が、19世紀に橋で結ばれてできた都市である。その名が示す通り、ブダペストは中央を流れるドナウ河によって市街地が東西に2分されており、西側のブダ地域と、東側のペシュト地域が橋によって連絡されている。

ハンガリー現象とは、20世紀初頭に、このブダペストから天才科学者が数多く、しかも短い期間に集中して出現した現象のことである。例えば、原水爆の開発で重要な役割を果たしたシラード、ウィグナー、ノイマン、テラー、しばしばピタミ



ンCの発見者とされるセント＝ジョルジ、放射線トレーサーの方法を開発したヘヴェシーは、皆ブダペスト出身であり、1910年までに生まれている。また、ハンガリー出身のノーベル賞受賞者は13名（このうち自然科学に関する受賞は11名）であり、人口比では最高水準である。この様にハンガリー出身者に著名人が多い理由については、主に社会的背景の重要性が提唱されている。

何人かの科学者についてその生育歴を探ってみると、1) 彼らは主にベシュト地域の出身者である、2) ユダヤ人が多い、3) 限られたギムナジウムの出身者である、という共通の特徴がある。

当時、ユダヤ人の裕福な家庭では、息子に家庭教師をつけて良い教育を与えようとする傾向があった。また、ギムナジウムでは優秀な学生や教師を優遇する仕組みや、数学や物理の成績を競う学生コンテストがあり、高いレベルの教育が行われていた。このコンテストは、ケマルという数学コンテストや物理オリンピックとして現在も続いている。

このギムナジウムに入学できたのは、一握りのエリートのみだったが、ハンガリー現象の科学者達は皆裕福な家庭に育ったのである。この頃のハンガリーは製粉業や千年祭に伴う大建設ブームによる著しい経済成長期にあり、彼らの父親が何れも成功した事業家であったことは注目すべき社会背景である。

彼らが科学者として最初に活躍したのは、主にドイツだった。第一次世界大戦の敗北によりハンガリーは領土の3分の2を失い、経済基盤を喪失した。このような危機に際し、彼らはドイツでの大学教育や科学上の名声と職業を目指したからである。ドイツで名声を得た彼らの何人かは、その後ヒットラーの登場に伴いアメリカへ移住し、そこで活躍した。

ハンガリー現象の科学者達は、何れもギムナジウムで伝統的な厳しい教育を受けていた。また、主に応用科学を専攻し、数学の高い能力を身に付けていた。彼らが活躍したのはハンガリーではなかった。ドイツの周辺国であるハンガリーでは、科学で実力があれば受け入れはドイツという構図があったからである。

## ■理科総合分科会

### 〔研究発表〕

#### 「上ノ国高校における4年間の実験実践について ～簡単にできる身近な材料を用いた実験～」

上ノ国 栗山 亮

生徒にとって身近でわかり易いいくつかの演示実験・生徒実験を行った。この内、原子模型・胚の立体模型は、それぞれ電子配置・胞胚腔のイメージ付けに有効だった。また、エタノールの爆発は音が出て楽しく、手羽先の骨格標本は完成度の高いものができるため意欲的に取り組んでいた。さらに、消化酵素の実験では市販の胃薬を活用する工夫をした。この他にも、ごみ袋熱気球の作成、脳の観察・食塩の融解熱・大気圧で缶潰し・紫キャベツの色素抽出・半透膜の働き、に関する実験を行った。今後は新たな素材を用いた実験開発に取り組むとともに、レポートでは授業で学んだ知識を応用するような考察をさせたいと考えている。

### 〔研究発表〕

#### 「商業高校における理科総合A（物理分野）の指導事例」

小樽商業 武田 伸彦

理科総合Aにおいて、教養としての物理を理解させるために必要な基礎的概念を扱った実験を行った。力学については水圧で縮んだカップ麺容器やジャムの瓶に入った硬式テニスボールを提示し、力の変形を説明した。熱については、圧縮発火器や雲をつくる装置を用いて断熱膨張と断熱圧縮を演示した。波については、波動実験機・モノコード・オルガン管、等により音波を、生物顕微鏡とフィルムケースを用いた簡易偏向顕微鏡により岩石プレパラートを観察させ光波を扱った。また、電子天秤を用いた静電気の引力・反発力の測定やゼネコンによる発電量の測定実験、校舎内外における放射線のグループ測定実験などを実践した。

### 〔研究発表〕

#### 「パプアニューギニアの自然とヒューマンインパクト」

札幌第一 荻原 法子

2007年8月2日から、オーストラリアでの国際第四期学連合17回大会と巡検B7「パプアニューギニアにおける最近二万年間の気候変動、ヒューマンインパクト、破滅的な事件」に参加した。オーストラリアとパプアニューギニアは Gondwana 大陸の一部であるため、南極フロラを起源とし、一部は現存している。国土のほとんどは山岳地帯であり、熱帯雨林と湿地帯に覆われている。マウントハーゲンの山麓、峡谷の至る所で焼畑農耕栽培が行われ、バナナ、コーヒー、タロイモ、サツマイモなどが栽培されていた。またアブラヤシのプランテーションは広大なもので、ヒューマンインパクトをかなり受けていると感じた。

### 〔研究発表〕

#### 「水鳥調査から時空スケールの実感

#### —学校設定科目「知床自然概論」授業実践例—

斜里 植木 玲一

細井 久美子

知床自然学習は2単位で、野外学習はそのうち3割、また年間5割は知床博物館の学芸員など外部講師の方をお願いしている。斜里高校では周囲2kmの範囲内で多様な自然を見ることができる。水鳥調査では、高校裏の斜里川周辺と河口付近で観察を行い、ワークシートに観察記録を記入する。また博物館から借りた剥製を見ながら鳥類の大きさ、特徴の違いなどを生徒達は実感している。観察結果より斜里川下流から上流に向かってカモメ類、潜水カモ類、水面採餌カモ類という順で分布し、わずか200mの間でも多様性がみられた。鳥達は沿海州と東南アジアの間で渡りをしており、鳥類を通じてグローバルな環境保全の意識付けが生徒になされたと思われる。

### ■物理分科会

#### 〔講演要旨〕

#### 「光子の不思議と量子情報通信処理」

北海道大学電子科学研究所電子材料物性部門  
教授 竹内 繁樹 氏

近年の技術の進展により、ちょうどナノテクノロジーの進展によって原子や分子を一つずつ制御しつつあるように、「光子」を一つずつ制御できるようになってきた。この技術の発展をベースに、光子がもつ量子力学的な性質を直接情報通信に応用しようとする研究が展開しつつある。

本講演では、この「光子」の不思議な性質と、その性質を情報処理へ直接応用する量子情報通信処理の研究の最前線について、講演者の研究室の研究成果を交えながらご紹介いただいた。

### 〔研究発表〕

#### 「コース別授業実践について

#### ～北大からトヨタまで～

北海道栄 山田 高嗣

全日制普通科である北海道栄高校は、特別進学、普通進学、学芸・保健体育、自動車工学というコース制を設けている。

本発表では、特別進学コースと自動車工学コースの物理の授業において、生徒の学力に合った授業レベルと、希望進路達成に役立つ授業内容や学習意欲を高める工夫の一例として、生徒による「自作問題演習」による授業実践を報告いただいた。

### 〔研究発表〕

#### 「ホール・センサーを用いた携帯電話の電磁波測定—生活環境中の電磁波による健康リスクと環境教育—」

旭川東 萬木 貢

ホール・センサーを用いて、自作の電磁波計測計の作成方法が分かりやすく解説され、それを用いた磁場と電磁波強度計測の様子が紹介された。また、電磁波の生態に及ぼす影響を物理教育の視点から考察し、環境教育まで視野に入れた物理実験授業の実践発表であった。

電磁波の生態影響の学習は、エネルギー保存則、自由エネルギーを学ぶ優れた教材である。高校生

の90%以上が携帯電話を所持している現状を考えると、電磁波の健康リスクについても教える必要性を感じるという結論であった。

#### 〔研究発表〕

##### 「シャボン膜の力学的反応について」

札幌開成 堀 輝一郎

開成高校コズモサイエンス科による、研究内容の紹介。

「PHYSICS OF FLUIDS」誌に水平なシャボン膜に液滴を落とすという内容の実験が紹介されたことを受け、この実験データを整備し、シャボン膜と液滴の数々のマクロな実験結果から、分子レベルでのミクロな状態の予測。さらに水平なシャボン膜に低周波発信器により音波を当て、二次元の定常波の観察を行ったという途中経過発表であった。

#### ■化学分科会

##### 〔講演要旨〕

##### 「有機電子材料の発展」

北海道大学触媒化学研究センター

教授 高橋 保 氏

我々の今日の生活に欠かすことのできない半導体について、世の中の流れがどのように変わっているのかをテーマとして、ご講演された。

現在実生活で利用されている半導体は、シリコンやゲルマニウムなどの無機半導体であるが、硬い無機半導体に代わってやわらかい有機半導体が開発されるとどうなるか。有機物は溶解性が高いのでインクジェット、印刷技術で機能性材料が製作できるなど無機半導体ではできない新しい世界が開けてくる。ただ、性能の面で無機半導体に対抗できるものがなかなか登場しなかった。ところが、1997年にポリアセン誘導体のペンタセンが登場してきた。ペンタセンが非常に高いキャリア移動度を持ち、アモルファスシリコンに匹敵する値が報告され、躍目を浴びてきたのである。これは無機半導体が使われている様々な分野に有機半導体が進出してきてくる新しい世の中の変革を意味している。しかし、ペンタセンは有機溶媒に不溶なので、有機溶媒に可溶性置換ペンタセンの合成が

重要になり、その合成法や機能の安定性がさらに求められている。

このような有機半導体の進歩を眺めながら、それに関する自らの最先端の研究などを分かりやすく説明しながら解説していただいた。

#### 〔研究発表〕

##### 「生徒が意欲的に取り組む実験を目指して～普段の実験から創立50周年記念課題研究まで～」

利尻 山崎 努

本校で行ってきた実験・観察指導において、生徒の興味・関心を引き出し、生徒が意欲的に取り組むための働き掛けや工夫について大きく分けて3つの観点から紹介された。(1) 実験についての働き掛けや工夫として3項目 (2) レポート作成についての働き掛けや工夫として5項目 (3) 課題研究についての働き掛けや工夫である。

その成果として生徒が積極的に実験に取り組んでくれ、科学的に探求する能力や態度を育てることができたという報告があった。

##### 「ペットボトルを用いた気体発生装置の開発」

札幌西陵 藤田 啓太郎

地域性・学校事情からの経済的不安に伴い実験器具の購入費用の縮小や環境・安全への配慮の流れから実験機会の減少につながっている。そこで、「いつでも」「誰でも」「どこでも」できる実験装置として、安価で、身近にあるペットボトルを用い、その他に安全性を考慮し、様々な工夫を凝らした実験装置を作製した。そのことで、工夫・独自性を生徒に提示することにもなり、生徒もそれに応えようと努力し、授業への取り組みもより積極的になったという報告があった。

#### ■生物分科会

##### 〔講演〕

##### 「葉緑体進化のダイナミズム」

北海道大学理学研究院

教授 堀口 健雄 氏

葉緑体は共生起源であるという光合成の歴史から講演ははじまる。一次的に葉緑体を獲得した緑色・紅色・灰色植物などの一次植物の話、二次的

に葉緑体を獲得した褐藻類・珪藻類などの二次植物の話へと展開し、渦鞭毛藻類にみられるダイナミックな葉緑体進化の話に発展した。

講演を受けて質疑応答が行われた。以下に代表的なものを紹介する。

Q. 共生は葉緑体が求めて行われたのか？それとも生物側が求めて取り込んだのか？

A. 葉緑体が望んで取り込まれたわけではなく、餌として取り込まれたのがスタートである。

Q. 二次共生と比べた一次共生の難しさは？

A. 二次共生の方が遺伝子を変えるなど葉緑体としてのさまざまなプロセスがクリアされている。

Q. 今日の内容を高校の授業でどのように扱えばよいか？

A. 走行性の実験、分裂・発芽と光の関係などが考えられる。

#### 〔研究発表〕

##### 「地域素材を生かした環境学習の試み

##### ～学校設定科目「環境科学」の実践～

沼田 山岡 景寛

沼田高校で学校の特色として推進している環境教育の一つとして学校設定科目「環境科学」を実施している。授業での取り組みから、2年次に行う地域の自然環境を題材とした「沼田の生物たち」を題材とした「利雪学習」が紹介された。「沼田の生物たち」は多様な環境を守ることの意義を認識させるのが目的で、図鑑を使った生物調べや植生図の塗り分け作業、雨竜川周辺の生物分類などを行っている。「利雪学習」は利雪・克雪・親雪・学雪の4観点から雪について学ぶことを目的とし、雪山造成作業や町内利雪関連施設見学、講義などを行っている。また、小・中学校や他高校との連携や学校外への情報発信なども行っている。

##### 「『生物学的窒素除去』の多角的検証」

白老東 奈良 尚久

生物Ⅱで硝化・脱窒の内容を扱うが、教材化することが難しく、イメージがつかみにくい。そこで、①硝化細菌を用いた実験スケールでの硝化実験の方法、②硝化細菌を高濃度に保持するための

硝化細菌の固定化方法、③脱窒反応と組み合わせた「窒素循環のメカニズム」の実験を紹介された。また、それらが生物Ⅱ・理科総合・環境教育の教材として利用できるかの検討した。

併せて、白老東高校で行われている「授業に関するアンケート」の結果が紹介された。これは、多様な観点から授業を組織的に検討し、学校をあげて改善策を立て、実施することを目的として行われている。

#### 「生物「My図説」の作成」

釧路江南 早津 茂行

生物Ⅰの教科書全範囲を、履修生徒で頭割りし各自の分担を決め、それぞれのページから「重要と思われる図・グラフ」を選び、図については製本・配布後に各人が「色をつけながら」学習できるように「塗り絵の枠線」のように描かせたものを集約した冊子である「My図説」が紹介された。

生物での知識を定着させていく面に加え、特に図やグラフを読み取っていく力を養成していく必要を感じていたため、昨年度からこの取り組みを行っている。また、試験の前日・当日に、移動時に教科書や参考書・問題集などが一冊にまとまっているとよいだろうと思い作成した。今回は生物Ⅰの範囲のみの取り組みであったが、生物Ⅱで出てくる図・グラフの解釈にも、抽象的ではあるが、効果が伺われたと判断できると考え、有用な自作教材として紹介された。

#### ■地学分科会

##### 〔講演要旨〕

##### 「自然災害の軽減を求めて

##### ・・・有珠山噴火からのメッセージ」

北海道大学

名誉教授 岡田 弘 氏

20世紀の火山災害は時代が進むほど観測や研究が進み、「自然」災害の要素から「人災」の要素が大きくなっていく。例えば2万人以上が犠牲になった1985年のネバドデルルイス山の泥流災害では、ハザードマップが既に作成されており、予測通りの泥流だったにも関わらず被害を防ぐことができなかった。これはいくら火山学者が予測した

ところで、情報を行政や住民と共有しなければ無意味であり、火山学者はハザードマップができてからの責任も共有しなければならないことを示している。

2000年有珠山噴火は上記の事例や過去の有珠山噴火や十勝岳噴火の際の経験が活かされたこととなった。噴火5日前から発生した前兆地震の時から情報を気象庁、北海道庁、地元市町村と共有し、1995年に完成したハザードマップに従い避難対策を立て、住民やマスコミに正確に伝えることで犠牲者をゼロにすることができた。大切なことは行政・マスコミ・科学者で情報の大きな三角錐をつくり、この上に住民を乗せることで被害や犠牲を少なく、あるいはなくすことができるということである。

#### 〔研究発表〕

「地球温暖化を論ずる上での大気—海洋間の重要性」

利尻 高橋 伸元

利尻島は四方を海に囲まれている。この海洋が二酸化炭素の循環に大きな影響を及ぼしていることを生徒はあまり理解していない。授業において、南極氷を入手して含まれている太古の大気を実感させたり、冷たい海水と暖かい海水のどちらが二酸化炭素を吸収するかをコーラを使って実験したりして、海洋の重要性を生徒に伝えるべく実践を行った。

「自然科学同好会で取り組んだローム層の調査について」

厚真 金川 和人

有志で結成した自然科学同好会で安平町周辺に分布するローム層の調査を行っている。ローム層の密度や粒度、硬度を調べることにより「時系列変化」をキーワードとして、地球規模と地域での環境変化（気候変化）の連動性を考える手だてとしている。また火山学会や地質学会等の学生ポスターセッションにも積極的に参加し、生徒の探究心を高めるようにしている。

## ●保健・体育部会 .....

〔講演要旨〕

「身体トレーニングの効果を高めるスポーツ栄養学」

～高タンパク質・アミノ酸の摂取とそのタイミング～

北海道大学大学院 教育学研究院

教授 水野 眞佐夫 氏

運動時の分岐鎖アミノ酸（BCAA）の摂取は筋タンパク質分解を抑制する。心理的に「楽である」と感じる軽強度な運動であっても、活動筋群の筋タンパク質の分解が高まるため、筋タンパク質分解の抑制をはかるため、運動時にはBCAA飲料の摂取につとめるとよい。

運動直後の高タンパク質栄養摂取は筋量・筋力へ及ぼすトレーニング効果を高める。実験では摂取されたタンパク質の総量以上が筋タンパク質として合成された。量ではなく刺激であるといえる。

最後に健康・からだづくりと骨格筋に関しては肥満・痩身傾向とも運動・スポーツによる骨格筋の発達が課題である。また、運動嫌い群が生活習慣病のハイリスク群（速筋優位型・脂肪不燃焼型）となっているため、指導者は運動嫌い群の運動トレーニング継続のための発動意志、健康主体の力量形成について、どう取り組んでいくかが課題となる。

〔研究発表〕

「確かな学力の向上を目指して

～保健・課題解決学習の取り組み～」

羽幌 岸本 泰輔

「生きる力」を育むため保健授業において課題解決学習を実施している。1・2年とも環境問題や食品衛生などが主な内容である、「社会生活と健康」を学習範囲としている。理由は平成15年に北海道ネイチャースクール奨励校に指定を受け、様々な体験学習や調査活動を行ってきたためこの学習範囲が生徒にとって高い学習効果が得られると考えたためである。また、社会に出て行く前の段階で、この範囲を深く学習することに意義があると考えたためである。生徒は自ら学ぶことにより、学習内容の知識・理解をより高めることがで

き、発表会を実施することで、複数の人々に自己の考えや主張を伝えることの難しさ伝える手段の工夫を学んだ。評価基準の見直し等の整備が必要ではあるが、人々の「健康」に対するニーズが様々な分野で高まっている今、主体的な判断力や行動力など、「生きる力」につながることに期待している。

#### 〔研究発表〕

#### 「清里高校における授業評価を通しての健康科学の授業の実践」

清里 上田 智史

本校で授業評価を導入してから3年が経過した。授業評価の校内研修において、共通確認された授業において全教員で行った確認事項を「清里メソッド」としてまとめ、わかる授業づくりに教師は努めていっている。そのような教育実践の中で、生徒に教養として健康について多くの分野から情報を取り入れ実践していく力を身に付けさせたいという理由から、健康科学の授業が平成19年度より新設となった。内容は講義・実技から調べ学習、発表、評価というスタイルで進め、内容の一例として「からだのつくりと働き」や「有酸素運動の実践」といったテーマで実施した。北海道で実践している学校は少なく苦労はしたが、結果的にこの授業スタイルは本校の生徒にとって効果的であった。

### ●養護部会 .....

#### 〔講演要旨〕

#### 「カウンセリングの基本技法」

鎌倉女子大学児童学部児童学科  
准教授 富田 久枝 氏

カウンセリングとは國分康孝のいうところによる言語及び非言語的コミュニケーションをとおし相手の行動変容を試みる人間関係と定義される。その技法とは、どの作戦でいくかという方略（ステラジー）とどの技術でその作戦を実行するかという技術で構成される。それぞれの技法にはそれぞれの理論があるが、現在は、精神分析論、自己理論、行動理論、その他の技法と理論を踏まえた折衷主義として、3つの新しい技法の捉え方

が主流となっている。

一つめはコーヒーカップ方式と呼ばれる、初期はリレーション。中期は問題の把握。後期は問題の処置を導く技法。

二つめは、マイクロカウンセリングという様々な技法を統合したトレーニング方法。マイクロカウンセリングの関わり技法には、関わり行動、クライアント観察技法、開かれた質問・閉ざされた質問、励まし・いいかえ・要約、感情の反映、意味の反映がある。積極的な関わり技法としては、焦点のあて方、各種の積極技法、対決による技法の連鎖及び面接の構造化（ラポール、問題の定義化、問題解決目標設定、目標に対するアプローチの選択、実行契約とフィードバック）がある。技法の統合も行われる。

三つめはヘルピング技法である。これは、折衷主義及びプロセスのモデルであり、誰でも使えるという特徴がある。概要は、カウンセラーとクライアントが相互に、事前及び第1～3段階を経て、それを第2段階のクライアントの自己探索にフィードバックさせる、というもので、関わり、応答、自己探索、意識化、自己理解、手ほどき、行動化の各技法が使われる。フィードバックによる援助過程の繰り返しが大切である。

#### ～ワークシートによる事例2例の実施～

カウンセリングの基本原則、國分による“治そうとするな、解ろうとせよ。「言葉じり」を掴まえるな、感情を掴め。行動だけを見るな、ピリーフを掴め。”を踏まえて、各自使い易い技法を取り入れて行くと良いであろう。

基本技法についての知識を広げその技法を実際の教育の現場や保護者・生徒の支援のときにどのように使うのかといった技法の活用及びその留意事項についてという内容であった。

#### 〔研究発表〕

#### 「本校における特別支援教育体制の構築と運用の実践報告」

寿都 乙川 望美

寿都高等学校が取り組み始めた特別支援教育の体制構築は、養護教諭と教務部長の2名のコーディネーターがいることに特徴がある。教務部長

は、養護教諭が支援計画を立てづらいと感じる学習面・生活面における支援計画を教職員全員へ働きかけ、委員会の規定や内規などを整備した。養護教諭は生徒への直接的な支援を継続的に行うとともに、支援委員会として担任、学年、管理職とともに関係機関や保護者との連携を行い、組織的な支援体制を整えた。高等学校における特別支援教育のモデルケースとしての可能性を見出される実践が報告された。

## ●芸術部会 .....

### 〔講演要旨〕

#### 「私が考える芸術」

画家 野田 弘志 氏

講演は、写実の存在意義について、まず、古典を代表するレオナルド・ダ・ヴィンチやフェルメールなどの作品とウォーホルやオキーフなどの現代作家の作品を取り上げ、「写実」と「前衛」という視点で行われた。

現代美術をはじめとする「前衛」は「写実」を否定し、越えていこうとする動きである。現代美術は見るものに謎解きをさせ、考えさせ解釈させるもので、背景理論があれば作品として成り立つ。

一方、「写実（リアリズム）」の根本は物の本質を捉えながら丁寧に描くことであり、物に強い存在感を持たせることである。現象ではなく、本質を見極め捉えることで空間の密度を高め、リアリティが増し、それによって物は永遠の存在となり崇高の高みへと結びつく。本来の芸術はこうして一つの作品として完結するものである。

野田先生自身は昨年より人間を実寸大で捉える作品を制作している。人間に崇高で本質的な魅力を感じ制作することで、人間そのものの神秘的な存在の凄みを感じさせることができる。

また、子どもたちにリアリズムをどう教えるかという質問に対し、「よく見る。正確に見ることから深く見ることにつながり存在の本質に迫ることができる。正しく見ることを作品に反映することが大切である。」と述べた。

## ■書道分科会

### 〔研究発表〕

#### 「おもいを筆に～『ヒロシマ』を書く」

旭川西 今野 康典

見学旅行における平和学習の一環として取り組まれた実践発表であった。他教科との連携を図りながらのテーマ学習で、H15年度から継続的・計画的に行われている。旅行前には「ヒロシマ」を表すことばからイメージを膨らませて作品作りをし、旅行後には体験・実感したそのおもいを込めて作品制作をする。ことばへの思いを実体験によって深化させることで、作品や制作態度に変化が現れ、生徒の気持ちの高ぶりと集中力を感じ取れたとの報告があった。

### 〔研究協議〕

創作の授業における指導の難しさ、教師側と生徒側の評価のずれなど、単位数の減少に起因する諸問題について活発に協議された。

## ■音楽分科会

### 〔研究発表〕

#### 「進学校における芸術科の取り組み」

室蘭栄 續木 辰也

過去10年間の音大の合否について検証した。本校は地域を代表する進学校であると同時に、実に多くの芸術系への進学者を出している。しかし同時に受験に失敗するケースも多く、その理由を考えてみた。本校は進学校であるために、生徒は国公立大現役合格という目標を持ち、音楽系の場合即ち「芸大」と考え、私立の音大を選択肢に入れず、難関校を受験し、失敗するケースが少なくない。その上、音大の進路指導の実情は、本人やレッスンの先生にまかせっきりであった事などが不合格の原因として考えられる。本校では音楽科教員が進路相談に入り、選択音楽や講習・添削での受験指導を行っているが、今後は担任や進路指導部だけでなく、レッスンの先生や保護者との連携した面談などを行うことができれば更に幅広いフォローができるであろう。

その他、学校祭での「サロンコンサート」や、文化系部活動を中心とした「総合芸術祭」の実施

など、文化系の取り組みを地域に発信することも芸術科教員の役目と考える。

本校を卒業し、専門教育を受けた生徒が地域の音楽教育を担うことも多い中、このような取り組みや教員との関わりが、後に大きな意味を持つことになる。

## ■美術分科会

### 〔研究発表〕

#### 「創意工夫における一考察

##### 一成就感のある単元設定とは一」

滝川 武蔵 恒一

滝川高校による美術1、2の実践を中心に、生徒の制作でのつまずきを、教師側の働きかけによって解消させ、制作に関わる技術を身につけさせることで作品を完成した喜びや、達成感や成就感を得られる教材について話し合われた。そのなかで、単なる技術の向上だけに終わらせるだけでなく、美術を通じて、自分で考え、イメージする喜びや作品に個性がでるような制作を目指した指導をすべきだという意見が出て、創造的な制作の大切さについて確認し合うことができた。

また、芸術鑑賞による校外学習の取り組みについて、他校の実践を交流しながら、実物を鑑賞することの大切さや、地元に着し特色ある美術教育の必要性について考えさせられる協議となった。

## ●英語科部会 ……………

### 〔講演要旨〕

#### 「新感覚☆わかる身につく英文法」

慶應義塾大学環境情報学部

教授 田中 茂範 氏

講演は次の3本の柱に沿って展開された。

1. なぜ、いま、文法と語彙指導なのか
  2. 身につける文法力と語彙力とはなにか
  3. わかる、身につく指導方法とはなにか
1. なぜ、いま、文法と語彙指導なのか
    - ・学習者から表現者になるために、コミュニケーション能力の基礎となる文法力と語彙力を育成する必要がある。(Learning by doing : 使うことにより学ぶ)
    - ・コミュニケーション能力を下支えするのは

Language Resources である。

- ・ Language Resources とは、語彙力、文法力、機能表現力であり、どれか一つの力が使われるのではなく、3つの力が相互に作用して発揮されるのである。(語彙を使い分けつつ「使い切る力」の育成が大切)
2. 身につける文法力と語彙力とはなにか
    - ・学習者になるほどそうなのかと理解し、英語を使いこなすようにすることが大切なスタンスである。そのために指導がしっかりと文法を教えきれるかがかぎとなる。(実際に助動詞を例にとって解説をされました)
  3. わかる、身につく指導方法とはなにか  
(エクササイズ論)

エクササイズは英語教育の中核である。英語がわかり身につくためには、しっかりと体系的な整理をする必要がある。また、良いエクササイズを作ることが必要である。

- ・オブジェクト論 (Why : 何のために)
- ・マテリアル論 (What : 何を)
- ・メディア論 (How : どう提示するか)

## ■第1分科会

### 〔研究発表〕

#### 「英語を使って英語の授業

##### 一思い立ったら今すぐに一」

砂川 城地 英典

英語は学びながら実際に使う事が必要であり上達の近道であるという考え方から、授業での取り組みを発表した。特に、ペアワークを用いた自由英会話や映画を取り入れ、生徒が楽しく授業に参加できる雰囲気作りの大切さを発表した。また、訳読無しの授業を通して生徒の取り組みが向上し、未習得語の意味を推測する習慣が生まれた効果を挙げ、授業改善の重要性を訴えた。

入学時では英語嫌いの生徒が多い1間口校での実践報告。英語好きを育てるために3年間を通したシラバスを作成している。授業はほぼ英語で実施している。リズムチャンツ、多様な音読練習、生徒同士のチューター制など様々な仕掛けを用意して授業にあたっている。国際交流活動にも力を入れており、楽しく学べる環境が出来ている素晴



らしい報告だった。

**「B-SLIM 理論とその背景にある概念を応用した英語指導の試み—ペアグループワークによる互いに学び合う学習者中心の英語授業—」**

下川商業 藤井 亜希子

B-SLIM 理論を利用した自己紹介スピーチ等の実践の発表。Scaffolding を活用し、簡単な自己紹介から、他己紹介、文法事項を取り入れたスピーチ、最後にスピーチ内容を暗記し披露するまでの実践指導。更に仮定法を含む英文 Love Letter の作成や Home Reading & Retell における Scaffolding を用いたペア・グループワークの実践報告がなされ、大変興味深い内容であった。

**■第2分科会**

〔研究発表〕

**「英語リスニング力を高めるための指導法—高教研研究紀要論文より—先行研究と実践・センター試験対策を含めて—」**

札幌旭丘 庄末 剛

センターのリスニング導入がきっかけで今回の研究に至る。リスニングの際、英文の処理と一定期間の記憶の保持が必要で、これを担っているのがワーキングメモリーである。様々な文献・実験データから、リスニングとリーディングは相反するのではなく補完しあうこと、及びワーキングメモリーの強化に音読リーディング、シャドーイングが有効であることを論証した。

**「OC におけるリスニング指導について—英語で英語を学習し、英語脳をつくる助けとなる授業を目指して—」**

札幌南 手塚 茂也

今年度学年全クラスの OC を担当しており、一貫した授業展開ができています。「真の英語を学べば受験指導にも対応できる」という信念と自分なりの見解を柱とし、実践しています。

① Read & Look up をスタートに ② Listening Comprehension ③ Dictation ④ Essay Writing (ALT との T・T) を取り入れた授業展開や使用教材の紹介、今後の課題等が豊富な資料を用い

て発表された。

**■第3分科会**

〔研究発表〕

**「よりよい自由英作文指導を目指して—手順とフィードバックを中心に—」**

函館中部 岩田 哲

本研究では自由英作文指導における教師のフィードバックが生徒の情意面に影響を及ぼし、fluency と accuracy 向上に効果がある点について考察した。すなわち教師がフィードバックをする際に、JTE と ALT とで添削観点を分担し、JTE は内容に関してチェックしコメントをすることに重点をおいて生徒のモチベーション維持を心がけるとともに、ALT は文法や単語等の local error を中心に添削した。結果として、平成18年度2学年生は1年間で G-TEC ライティング・セクションのスコア平均点が85.0点(4月)から122.4点(2月)へ37.4点向上した。

**「清田高校 SELHi プロジェクト**

**—SELHi は何を変えたか—**

札幌清田 熊谷 修司

3年前にスタートしグローバルコースを中心に研究が進められている。特徴は英語・OCでの少人数・TT指導、授業へのプレゼンテーションの導入、地歴科との連携による国際理解教育の推進等である。以上の実践は生徒の GTEC スコアを飛躍的に上昇させ、英語力を向上させた。また生徒は日本や世界で起きていることに目を向け、問題意識を持つようになった。

詳しくは「北海道高英研ホームページ」(<http://www.koeiken.hokkaido-c.ed.jp>)をご覧ください。

## ●家庭部会 .....

### 〔講演要旨〕

#### 「次期学習指導要領の改訂に向けて」

文部科学省初等中等教育局

参事官付教科調査官・教育課程家庭科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター

研究開発部教育課程調査官

望月 昌代 氏

『家庭科』は必履修教科となって3期目を終えようとしており、日本家庭科教育学会の全国の高校生を対象に実施した調査結果でも教科観は「生きていく為に重要」と認めている。特に保育分野において学習の効果がみられている。一方『家庭科』で行う取り組みについて現場からのアピールを更に充実させる必要がある。

学習指導要領の改訂へ向けた動きは、教育基本法の改正を受け、現代にあわせて情報や環境を取り入れ、平成23年に新学習指導要領を小学校実施予定で進んでいる。

学習指導要領改訂の基本的な考え方は、①改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂、②「生きる力」という理念の共有、③基礎的・基本的な知識・技能の習得、④思考力・判断力・表現力等の育成、⑤確かな学力の育成、⑥学習意欲の向上や学習習慣の確立、⑦豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実、である。

教育内容に関する主な改善事項は、社会の変化への対応の観点から、各教科等を横断して改善すべき事項と言え、環境教育、ものづくり、キャリア教育、食育、安全教育、情報教育、心身の成長発達についての正しい理解等があげられる。社会から求められる家庭科教育への期待は様々な分野にあるが、高校家庭科のポイントは人間の発達を学ぶ視点にたった家庭科教育の充実で、①人間の誕生から死に至る「人の一生」について発達の視点から見通す姿勢を身に付け、自らのライフプランを展望する力を付ける、②社会的な自立を支える視点を重視する、ことと言える。

そのための授業をすすめる上での留意点は①学ぶ意欲を高める学習指導、②家庭科の授業の組み立て、③生徒の興味関心に応える、ことである。これらを『言語活動の充実』という観点から見て

いく必要がある。

家庭科普通科目は『家庭基礎』2単位、『家庭総合』4単位、『生活デザイン』4単位とし、食分野についてはすべての科目で重視している。

### 〔研究発表〕

テーマ 「自立した生活者を育てる家庭科教育」

主 題 「情報社会の賢い消費者になろう」

副 題 一教科『情報』との相互乗り入れ実践とその後—

旭川凌雲 渡部 真紀

#### I. 愛別高等学校の学校概要

この内容は平成17年度に前任校の愛別高校で行ったものである。

#### II. 情報社会の賢い消費者になろう

学習展開は、8時間配当（家庭総合4＋情報A4）で、メディア・リテラシーを実践した。過程は、1)「私の買い物」と称した意思決定分析、2) TVCMの分析、3) 折り込みチラシの分析、4) オリジナルチラシの作成・下書きをする、5) オリジナルチラシの作成・パソコンで作る、6) コンテストの実施の順である。

2)では、広告の手法についてグループ討議を行い、有名人・安売り・期間限定・クーポン、キャッチコピー等の必要事項に気づかせた。また5)においては、事前に「情報A」の授業にてWORDの操作は学習済みであり、これを生かし、いくつかの条件を設け、行った。評価としては、時間配分に余裕があり、またTTを行えるなど小規模校ならではの実践ではないかと考える。

#### III. 家庭基礎のミニマムエッセンスの模索

この内容は今年度赴任した、旭川凌雲高校で行ったものである。

『世界がもし100人の村だったら(食べ物編)』を参考文献とし、ワークシートを作成し、2時間配当で行った。その際、生徒に考えさせたい数字の部分は空欄にし、ただ「読む」のとは違う緊張感を持たせた。

また、その他にインターネットや新聞掲載の記事広告、通信販売のカタログを教材として用い、世界各国の平均寿命やフェアトレード(公正貿易)について考えさせた。また、バイオエタノールの

新聞記事についても取り上げたが、これは原料やそれに伴う食料品の値上がり、環境問題等にも関連付けることができた。

今後は、時代の要請が真っ向から絡んでくる教科として、普遍的なものは継続実践し、生徒が実際に体験し今後の人生に生かせる教材・教科研究を行いたいと考える。

## ●農業部会 .....

### 〔講演要旨〕

#### 「農業の国際化(WTO等)に対応した北海道農業」

北海道農政部農業経営局長 渡邊 毅 氏

現在、農業政策の変革期を迎えている。戦後以来、農政改革が行われても現場に浸透しておらず誤解されている面も多い。なぜ政策変更なのかということについて1) 国内の担い手を巡る厳しい状況、2) WTO 農業交渉に関連しての補助金の是非の2点について踏まえつつ話をしていきたい。

北海道農政部農業経営局では北海道農業を担う人を育て行政サイドからバックアップするという役割を担っているが、今後は経営感覚に優れ、自立的で経営判断力を身につけた担い手でなければ生き残ってはいけないだろう。

全国でいわゆる集落は4万ほどあるが、担い手のいない集落は半分ある。これでは農地確保、政策が立ち行かない状況にある。昭和一桁台生まれの人も多く農業現場において現役として活躍しているが、10年後にはリタイヤする人も増えてくるであろう。

2005年食料・農業・農村基本計画に基づく農政改革においては17年3月に決定した「食料・農業・農村基本計画」に基づく新たな政策の展開に向け、10月に「経営所得安定対策等大綱」を決定、さらに本大綱に基づき品目横断的経営安定対策(19年産～)や資源・環境対策(19年産～)が導入されるとともに米政策改革推進対策の見直し(19年産～)が行われる。

品目横断的経営安定対策はその主旨として農業の構造改革の加速化とWTOにおける国際規律の強化への対応及び担い手の農業経営の安定と国民に対する食料の安定供給の確保の2点が挙げられ

る。いわゆる全農家を対象とした品目ごとの政策から意欲と能力のある担い手を対象とする経営全体に着目した政策への転換である。

我々は担い手を支援し、育てていかなければならないのだが、もはや反当たりいくらの収益を上げるとか作ればよいという考えは普通の経営者とは言えない。こういう政策は国際規律のためできないのである。真の経営者となるべく自己の経営をしっかりと見つめ経営方針をしっかりと立てられるような農業経営者を育てるべく先生方にもご指導をお願いしたい。

### 〔研究協議〕

#### 主 題

「生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるためのキャリア教育をどのように農業教育で推進すべきか」

#### 研究協議題

「農業経営者に必要な経営管理能力や企画力を身につけさせるためのプロジェクト学習の進め方」

今年度より研究協議主題に沿った討議の時間に重点をおくため従来行われていた研究発表を極力縮小し、討議の形式とパネルディスカッション形式を取り入れた。このことにより各分野(JA、生産者、農業行政)からの意見を出しやすくし、今後の農業教育を考えていく上で外部意見も取り入れ、中身の濃いものとしたいと考え、研究協議の方法を一新した。

### 〔話題提供〕

「別海高校におけるホームプロジェクトを中心とした酪農教育の実践について」

別海 漆原 剛

平成19年度入学生より定時制課程酪農科が募集停止となり、新たに全日制課程酪農経営科を開設。本学科の新設の目的は釧根酪農を支える地域の担い手の育成にある。

地域を支えていく酪農経営者は地域で育てて行くという観点から「別海酪農研修牧場」やJA「預託センター」「育成センター」で本校生徒の実習を受け入れて頂いている。

HPの導入により次の効果が挙げられると考え

ている。1) 酪農教育の実践 2) 経営感覚を身につける 3) 親の背中を見せる 4) 地域密着型教育の実践

今年度のHPでの取り組みの例として1) 経営実態調査 2) 環境へ配慮した堆肥化への研究 3) グリーンツーリズムへの取り組み 4) 長年使える牧草地の管理方法の研究等が挙げられる。

今後についても国際化に対応した農業経営が求められるためコストをかけない自給飼料の生産～牛乳、肉生産へと発想力を生かす人材の育成が大切である。

## ●工業部会 .....

### 〔講演要旨〕

#### 『鉄鋼業における「ものづくり」の実際』

##### —世界最大の600ton 鋼塊製造—

(株)日本製鋼所 室蘭製作所  
製鋼部長 柴田 尚 氏

(株)日本製鋼所は、日本の軍需産業を支える企業として明治40年に創立されたが、戦後は砲身製造技術を基盤とした民需品製造を行っている。現在の主力製品は電力発電用鍛鋼品、原子力発電用鍛鋼品、石油精製用压力容器、鋼材鋼管などのエネルギー分野製品群であり、近年のエネルギー需要拡大を背景に急速に売上高が伸長している。

今回は素材である鉄の特殊性に触れると共に、当所の代表的な製品と製造工程、さらに製鋼工程の概要と世界最大の600ton 鋼塊の製造方法について述べる。

鉄は全宇宙に多く存在する安定元素の一つである。特殊な変態特性を有することと合金の調整域が広いために、材料特性をカーボン等の合金元素量の添加量や熱処理により自在にコントロールできる特殊な素材である。当所ではこの鉄の特長を活かして発電用ローターシャフト、原子力発電用压力容器、石油精製用压力容器などの大型鍛鋼品を製造している。

鍛鋼品の代表的な製造工程は①鑄込み→②鍛錬→③熱処理→④機械加工→⑤検査→⑥熱処理→⑦機械加工→⑧検査→⑨機械加工→⑩出荷検査である。製品の特殊性から万が一の不良も見逃さない

検査体制で製品生産に当たっている。

近年、安全性や効率向上の視点から部材の大型化が求められており、それに伴って大型の鋼塊製造の必要性が高まっている。大型鋼塊製造技術は当初各国の数種の方式が考案されたが、現在は当所が開発した複数鍋を使用して連続的に真空鑄込みを行う技術のみが工業化されており、600ton 鋼塊を実現できるのは世界で当所だけとなっている。

このオンリーワンでありナンバーワンの技術を支えているのは職員の高い技術・技能である。ものづくりの神髄は物理・化学の法則を十分に理解して如何に工業的に具現化するかにあると考えられる。

### 〔研究発表〕

#### 「社会人入学生受け入れのための取組」

##### 『公開講座と Power Point 授業の展開』

小樽工 平井 柳太

- 1 公開講座 地域住民に校舎設備の利用、授業成果の還元を通し後志地区唯一の工業高等学校への関心、理解を持っていただくため開催することとした。
- 2 Power Point を利用した「わかりやすい授業」の展開 資格取得、Power Point 授業を得意とし「わかりやすい授業」を推進する専門学校(学校法人北海道中央工学院 札幌建築デザイン専門学校)と連携し、教材を本校生徒用に修正し、授業に取り入れ実践する事とした。

#### 「高校生ものづくりコンテスト電子回路組立部門」

帯広工 飯塚 浩二

高校生ものづくりコンテスト全国大会は今年で7回となった。電子回路組立部門は、実社会でのニーズが高い組み込み技術の習得を目指している。これまで北海道は優勝2回、準優勝2回と、すばらしい成果を上げてきた。全国からも注目されている。今後は、北海道内における工業高校全体の技術力の底上げを目指そうではないか。特に若い先生に大きな期待をしている。技術を吸収する場合は意外と身近にあるので探して欲しい。迷わず技術を吸収すべきだ。その吸収した技術を生徒

に還元し“技術屋を育てる”ことが我々の仕事である。(研究発表資料は帯広工業高校のホームページからダウンロードできます。)

### 「釧路川水防公開演習の参加と成長」

釧路工 佐藤 貴雄

今回の発表内容は釧路川水防公開演習に参加した生徒たちの変化、クラスの変化を主としている。入学時より問題とされていたクラスにおいて水防工法のアイデアを出し、設計し、そして施工するという水防史上初の試み、そして学校としても水防主催の開発局としてもすべてが初めてという条件の中、生徒たちの不断の努力と熱意により無事に成功を収め我々教員にも多大な影響と感銘を与え、生徒たちも大きく成長し個々の進路目標を達成した。

## ●商業部会 .....

### 〔講演要旨〕

#### 「地域に根ざした企業経営」

株式会社北海道日本ハムファイターズ  
取締役会長 今村 純二 氏

日本ハムファイターズは、1974年後楽園球場をフランチャイズに、日拓ホームフライヤーズを引き継ぎ発足した。1988年に東京ドームへ移転した当初は観客動員数が年間245万人と黒字であったものの、2002年には126万人と大幅に減少し、赤字体制から脱却することができなかった。読売ジャイアンツとのダブルフランチャイズや選手の年俸の高騰などもあって、パシフィックリーグの地域分散が検討されることになった。

2004年には「北海道日本ハムファイターズ」として、新しい活躍のフィールドに北海道を選択した。この誕生にあたり、地域に密着し、なくてはならない存在になるため、チームとフロントが同じ考え方に基づいて活動する球団理念を設定した。

1つ目の企業理念は、「Sports Community」で、スポーツと生活が密着し、心と身体の健康を大きくむコミュニティを実現するために、地域社会の一員として地域社会との共生をはかることである。2つ目の経営理念は「Challenge With Dream」

で、既存の概念にとらわれず、長期的・継続的視点に基づき、チーム、ファン、地域社会と共に成長し、夢を持った挑戦を実践するプロ野球集団を目指していくことである。3つ目の活動指針は、「Fan Service 1st」で、選手に留まらず、フロント自身が最初のファンとしての眼差しを持ち、ファンサービスを第一に考えることである。

これら3つを土台に踏まえ、強いチームづくり、道民球団としての定着、最終的には企業球団から地域球団へといったファイターズスタイルの野球を目指した。

強いチームづくりは、スカウティングと選手育成からなる。強いチームでエキサイティングなゲームを提供することにより、感動の共有実現に努めた。また道民球団としての定着のため、ほぼ全市町村への訪問と、全道での野球教室を行った。野球教室は、子供たちに野球への夢を広めたい思いで行っている。

初年度の札幌ドームの観客数は伸びなかった。転機は2004年9月のプロ野球初のストライキだった。ストライキ中、ヒルマン監督は札幌駅でサイン会を行い、選手はファン交流サイン会を実施した。このファンとの距離を縮める努力が転機となった。ストライキ直後の試合では、4万人ものファンが球場を訪れた上、新庄が満塁ホームランを打ち大変盛り上がった。この試合を機に、急激に観客数が増えていき、ファンの視点から見てのあるべき姿と、ファンの望むことを選手・フロントの両方が自覚し、実現していくことになった。

現在はファンのために、野球教室(野球塾)の実施、選手の小学校訪問、球団マスコット「B☆B」の活動、サイン会・握手会の実施、地域物産イベント、少年野球大会の開催などを行っている。

### 〔研究発表1〕

#### 「本校における『インターンシップ』および『進路プロジェクト』の取組について」

美唄 深戸 紀明

#### 1. 本校の情報ビジネス科

本校は平成11年4月、美唄東高校と美唄南高校を母体として設立された。普通科、農業の学科である食品システム科、家庭の学科である生活デザ

イン科、商業の学科である情報ビジネス科という四つの大学科からなっている。情報ビジネス科は①各種上級資格取得の推進、②「校内実務競技大会」の実施、③「商業クラブ」の活動、④インターンシップ・進路プロジェクトの取組の四つを目標にしている。

## 2. インターンシップ・進路プロジェクトの取組

平成15年度は第2学年の9月に3日間実施し、地域は「美唄市内」に限定した。16・17年度は実施地域を拡大し、可能な限りノウハウを持っている大手企業にお願いして10月に3日間実施した。18年度は、1単位を総合的な学習の時間である「進路プロジェクト」として、進路に対する意識づけをねらいとしながら年間を通して取組むことにより、時間的にも内容的にも充実した事前指導を実施することができた。

平成19年度は普通科と合同実施になったため、「進路プロジェクト委員会」を中心として進められた。普通科の生徒も含め89名全員が10月の3日間、美唄・岩見沢・三笠・札幌の計51の事業所・学校で実習を行った。また、新たに次のような取り組みを行った。

### ○職場レポートの実施

自分の希望する仕事に就くために必要なことや仕事内容を知ることなどをねらいとし、6月に実施した。生徒が質問事項を用意して事業所を訪問し、約1時間程度、仕事内容についての説明を受けた。内容をまとめながらレポートを提出することにより、自分の希望する進路について考えさせた。

### ○自己紹介カードの作成

実習先決定後に「自己紹介カード」を作成させた。履歴書や進路用の願書などを書くことも意識させながら細かく指導した。「自己紹介カード」は実習当日、実習先に持参させた。

## 3. 今後に向けての課題

複数回の実施や長期休業中の実施について検討が必要である。また、「言葉遣いができていない」「積極的に挨拶を」という指摘があることから、挨拶、マナー指導の徹底が必要である。事前打ち合わせに実習生も入れること、事後指導として発表会・報告会を実施することなども検討したい。さらに現在、保育所実習・施設見学のみ行ってい

る生活デザイン科と食品システム科でも進路プロジェクトを実施し、「学科ごと」の取組から「学年・学校全体」での取組へと移行させることが望ましい。実施にあたっては、教育課程の変更も含めて総合的な学習の時間の内容や展開、その指導組織・体制を見直し、改善を進める必要がある。

## 〔研究発表2〕

### 「本校の就職指導の改善に関する研究指定に係る進路指導について」

#### ～専門高校における就職支援の成果と課題～

留萌千望 富永 薫

### 1. 本校概要と研究指定

本校は留萌管内唯一の商業関係学科と工業関係学科を併設する専門高校である。現在は、情報ビジネス1学科・電気システム1学科・建設1学科の計3間口の学校である。効果的な就職指導の在り方等を調査研究し、実践することを目的として、平成16年度より、「就職指導の改善に関する研究」の指定を受けるに至った。

### 2. 就職に関する状況

平成15年度までは一度も就職試験を受験しない「ゼロ回受験者」の生徒が一部いたため、平成16年度に本校生徒に対しキャリアカウンセリングを導入した。11月からは、就職試験の併願も認められ、「ゼロ回受験者」は年々減少傾向にある。早期離職は、本校でも大きな問題になっており、就職後約1年経過した時点で、卒業生の追跡調査を行っている。特に、平成18年度卒業生に関しては、全体の約27%が就職後1年以内に何らかの理由により離職している状況である。

### 3. 就職支援に向けた具体的な取り組み

求人確保、生徒の就職意識の向上、離職防止に向けた取り組みを行っている。受験前の企業見学を実施し、企業と生徒のミスマッチを防ぎ、企業先へ生徒が事前に訪問し、施設見学や職場体験を行った。

### 4. 生徒への効果と変容

1つ目は求人増加による受験機会の増加である。就職希望者が昨年中に一度は就職試験を受けており、既に「ゼロ回受験者0」が確定している。2つ目は生徒の就職意識の向上である。各種ガイ

ダンス・進路講話・職安職員や進路相談員、PTAによる進路相談等の効果もあり、就職促進会や企業訪問への積極的な参加がみられた。1年次より続けてきた朝学習や一部の教科で取り入れてきた一般常識問題などの学習の中で、苦手意識を克服し、積極的に就職試験にチャレンジするようになった。3つ目は就職内定率の向上である。11月末での内定率は62%と倍増し12月の初旬では70%、12月末には80%に達した。年内に70%を超えたことは珍しく、研究指定を受けての様々な取組が結果として就職内定率の向上につながった。

### 5. 課題と課題解決のための方策

1つ目の課題は訪問企業の精選および学校と企業間の信頼関係構築と維持、2つ目は生徒が自己の適性を早期に把握すること、3つ目は離職防止対策である。様々な機会を通して職業観や勤労観を身につけさせたいと考えており、受験前の企業見学を今後も積極的に取り入れたい。また、基本的な生活習慣を確立させるとともに、「社会が求める人材」を育てるべく、確かなコミュニケーション能力を育成することも重要であろう。

#### 〔研究発表3〕

##### 「本校における課題研究の取り組みについて」

岩見沢緑陵 坂口 勝幸

本校は岩見沢市立高校で、昭和49年、私学2校と合併して現在の形になった。元々は普通科4間口、商業科2間口だったが、地域のニーズもあり、平成14年に商業科を情報コミュニケーション学科に転換した。2年次より情報科学コースと情報経済コースの2コース制を取っている。

本校の課題研究は平成8年、かなり未完成の状態スタートしたが、年々改善していった。特に平成10年からは、自治体ネットワークセンターを利用しての成果発表会を実施するなど、より一層の充実が図られた。

平成14年の学科転換に際し、地域からは、コンピュータを使えるだけでなく、ネットワークやホームページ等を管理できる人材の育成が強く求められていた。それに伴い、設備面でも質・量の充実が図られ、校内のネットワーク化やオフィスソフト以外にデザインやグラフィックなどのソフトも導入された。そのような中で課題研究を進めるにあたり、語彙力・表現力・想像力の低下が問題となった。多くの情報の中から必要な情報を検索できないという状況になりつつあることを危惧し、朝読書を導入して、力をつけさせた。またプレゼンテーション力の向上を目指して、「読んでまとめる」「聞いてまとめる」「考えを書く」「それらを伝える」というような、教科「国語」とは違う角度からの指導を実施した。

現在の課題研究の進め方であるが、2年次の2～3月にテーマを設定させる。これは3年生が発表会を行い、それを見た後である。その際には「地域重視」「商業に完結」という2点を守らせる。課題研究のグループは生徒自身で4～5人のグループを16～18作り、教員1人あたり2～3グループを担当する。生徒は「自分で動く」ということを原則とし、教員はあくまでアドバイザーに徹している。対外文書の作成や電話連絡等も全て生徒が行っている。

約1年近くの研究活動の後、1月に自治体ネットワークセンターにて、保護者や教育関係者、報道関係者に公開して、発表会を実施する。1グループ7分程度の発表を、教育局や市教委職員等も交えて審査を行う。発表会PRのポスターやプログラムは2年生が作成する。発表会の様子は、TV会議システムを活用して学校に配信し、優秀なグループは、エルネットで全国配信もしている。

このような活動を継続してきた結果、地域から本校に対する要請が変化してきた。それは、高校生に対するおつきあいという程度から、「ばんえい競馬研究」や「行政施策研究」など、高校生と一緒に何かをしようという動きへの変化である。

今後においては、科目「マーケティング」の力つけることや、コミュニケーション能力を一層高めることなどが非常に重要となるだろう。また、美術や家庭など、他教科との連携を図っていきたい。

今後においては、科目「マーケティング」の力つけることや、コミュニケーション能力を一層高めることなどが非常に重要となるだろう。また、美術や家庭など、他教科との連携を図っていきたい。

## ●水産部会 .....

### 〔講演要旨〕

#### 「夢、挑戦、そして人とのつながり」

海洋冒険家 白石 康次郎 氏

私は、東京で生まれ、父と、祖母に育てられた。

転居した鎌倉で海に出会い、その頃から、将来は世界を一周したいと思うようになった。

高校への進学は水産高校に決めた。家族旅行もしたことがない私にとって、無料でハワイに行ける事が魅力的だったし、何よりも海に係わりたかった。水産高校の機関科では、エンジニアの基礎をたたき込まれた。この経験が今のレースに活かされている。専攻科生の時、第1回単独世界一周レースがテレビで放映され、優勝者が多田雄幸さんという日本人であることを知った。感嘆した私は、多田さんを訪ね弟子入りをした。

師匠が第3回目の単独世界一周レースに出場する事になり、私はサポートをすることとなった。師匠は、ヨットも自分で設計しレースに挑んだが、途中船が損傷し、レースを棄権した。師匠は帰国を延ばし、養生をしていた。私は帰国しスポンサー等への挨拶回りを始めた。そんな折、師匠の訃報の知らせが入った。

師匠の遺志をつぐこと、世界一周をすることを胸に、私の挑戦が始まった。1991年太平洋単独横断に挑戦したが、途中トラブルにあい断念。2回目もマストが折れ途中で断念。3回目で、太平洋単独横断にやっと成功した。

これを機に世界一周ヨットレースに参戦、2006年に単独世界一周ヨットレース「50CEANS」クラス1に日本人として初挑戦した。

水産高校で教えてもらったエンジニアとしての使命「安全、確実に航海し、SOSを出す前に引き返す」が、レース運びの基本になっている。決して、自然を侮ってはいけない。私の座右の銘は西郷隆盛の「敬天愛人」(天を敬い、人を愛すること。)という言葉である。

## 〔研究発表〕

### 「民間教育を導入した施設の有効利用」

小樽水産 大町 善成

民間のダイビング教育(PADIシステム)の特徴や指導法、リスク管理、学校におけるシステムの導入等を研究し、学校で行われるダイビング教育との比較・検討を行った。民間の教育システムを学校に完全に導入するのは難しいが、取り入れるべき箇所はいろいろあり、技術の習得に専念す

るだけでなく、ダイビングを楽しむことを教える必要があると考える。

### 「過渡期にある樽水についての考察」

小樽水産 我妻 雅教

小樽水産高校のここ数年の変化に対し、本校職員はどのように感じているのかを調査するためアンケートを実施し、その結果を踏まえて相対化、対象化を行った。様々な課題が浮かび上がったが、最も重要なのは、目の前にいる生徒たちの成長と、彼らが現実から目をそらさずにそれを乗り越える手助けをすることであり、そのために我々は何をすべきなのかを考えて行動することだと考える。

### 「海洋技術科のコース制と進路の現状について」

函館水産 石尾 敏文

本校海洋技術科は2年次から海技コースと生産コースに移行する2類型制を導入しており、コース制と進路についての生徒意識、過去の進路の実態を検証した。調査の結果、生産コースの現状は厳しいものであったが、裾の広い水産関連産業の担い手としてコースの特性や進路意欲を深める体制づくりの必要性を強く感じる。また、それらに関連する教科内容の検討や資格取得指導、職場開拓等の研修を行う必要があり、今後の課題である。

## ●情報部会 .....

〔ワークショップ〕(ワークショップをWSと省略する)

### WS-I A

#### 「Net Commonsによる教材作成」

ファシリテータ 札幌稲北 川村 雅人

国立情報学研究所が研究・開発を進めているNetCommons(以下NC)は、お知らせ、Iframe、チャットおよび小テストなどの各種モジュールをブラウザ上で簡単に設置できるオープン・ソース・プラットフォームである。

本WSでは、札幌稲北高校の授業での活用例を挙げ、会場でも実際に参加者による教材作成を行なった。NCの教材作成での有用性を理解でき、質疑応答も活発な活気のあるWSであった。



## WS - I B

### 「新聞作成と評価（フリーソフトの活用）」

ファシリテータ 帯広柏葉 岩田 勝美  
札幌旭丘 高瀬 敏樹

帯広柏葉高校では、情報の収集・整理・発信、画像処理を学ぶ実習として、フリーのDTPソフトである朝刊太郎を利用して、新聞形式の見学旅行研修録を作成している。

本WSでは、新聞作成を実際に行いながら、実習と評価の観点とを結びつける工夫などについて考えた。本格的な新聞作成自体も参加者の興味を惹きつけるものであった。今後の授業にそのまま活かすことのできる、非常に有意義なWSであった。

## WS - I C

### 「ブレインストーミングとKJ法を用いた問題解決」

ファシリテータ 札幌拓北 梅田 充

札幌拓北高校ではプレゼンテーションを扱う授業に、問題解決の手法である「ブレインストーミング」と「KJ法」を取り入れている。

本WSでは、生徒が実際に付箋紙を貼りつけたシートを提示しながら、ブレインストーミングやKJ法が授業でどのように展開され活用されたのかを報告した。参加者は与えられたテーマについて5分の間に思いつくことを全て書き出す実習を行い、その効果を実感していた。コンピュータを利用しなくとも授業展開が可能な教材を紹介するなど、すぐにでも活かせる実践的なWSであった。

## WS - I D

### 「校内ネットワークのセキュリティと管理の効率化」

ファシリテータ Sky 株式会社 山本 和人 氏  
基本四情報（氏名、住所、生年月日、性別）をはじめとする個人情報を大量に扱う学校のセキュリティポリシーは企業とは異なる。

本WSでは、学校現場での情報漏洩事故の実例などから、学校のセキュリティがどうあるべきなのかを考えた。また、市販ソフトを使ったネットワーク管理・監視・セキュリティ設定も体験し

た。「個人情報には預かりものである」など、情報セキュリティに高い意識と自覚を持ちながら、「何を何から守るのか」を明確にしたうえで、その監査が必要であることを再確認するWSであった。

## WS - II A

### 「Web Diary Pro のインストールと実習」

ファシリテータ 札幌白陵 高木 裕  
鈴木 崇令  
竹中 直人

現在のインターネットでは、自分の考えや意見などを容易に発信できるサービスが普及している。しかし、誹謗中傷や個人情報の流出などの様々なトラブルが絶えず、情報モラル教育が必要とされている。

本WSでは、授業環境として学校内で完結するネットワークの構築と、授業での運用方法について学んだ。参加者は実際に、Apache、ActivePerl、Web Diary Pro のインストールと設定を行ったり、操作方法について実習したりするなど、非常に実践的で有意義なWSであった。

## WS - II B

### 「OSのセキュリティポリシーを用いたセキュアな情報教室作りとモラル教育」

ファシリテータ 札幌大谷 今井 豊章

Windows XP 標準添付のグループポリシーオブジェクトエディタ gpedit. msc は、共通に使用するPCの機能を約2000項目から選択して制限することができる。

本WSでは、項目設定の全てを記述したエクセルファイルを利用して、スタートメニューとタスクバーに制限を加える実習を行った。参加者の意見によって制限項目を決定する場面では、セキュリティやモラルの教育について改めて考える場となった。詳しい資料と丁寧な説明によるWSであった。

## WS - II C

### 「携帯電話との付き合い方」

ファシリテータ 音更 小湊 秀子  
今や携帯電話は、生徒にとって必携であり最も

身近なメディアであるが、問題の発生も少なくはない。

本WSは、業者が考える「ケータイ安全教室」の内容は生徒の実態に合わない部分が多いと感じたことから、自ら工夫して行った授業の実践報告をもとに進行した。参加者は、授業で使った生徒に対する事前アンケートに沿って具体的な事例を交換した。家庭も学校も避けては通れない、携帯電話の利用に伴う多くの難しい問題や課題を考えるうえで貴重なWSであった。

## WS - II D

### 「フレームワークで組み立てる簡単プログラム」

ファシリテータ 株式会社サイバーラボ

加藤 康之 氏

ドラッグ&ドロップなどの簡単な操作によりプログラムの部品を組み合わせ、モノ作りの感覚で高度なアプリケーションを作成できる Cyber Framework の講義と実際の操作を行った。「ハードウェアもソフトウェアも基本構造の連なりでできているが、それは生物と同じである」「自由度が高く操作が簡単で便利なツールであっても、自らモノを作り出す能力がないと意味がない。日本人はその能力を失っている」など、参加者にとって示唆に富んだWSであった。

### 〔基調講演〕

#### 「ICT教育がめざす本当の学ぶ力」

青山学院大学文学部教育学科

教授 佐伯 胖 氏

最近、子どもだけではなく大人にまでもコミュニケーション能力の劣化が見られる。お互い言いたいことを言い合うだけの会話が行われている。集まって独り言を言い合い、その場で応答もしなければ反応も期待しない。結果、孤独が深まっていき、出会い系などの匿名の応答に救いを求めるような事態も発生している。この原因は学校文化における「勉強主義」であって、これが真のコミュニケーションを失わせていると考えられる。

「勉強主義」において「勉強」とは、外的基準による評価を得るために行なうものである。知識項目を脱文脈的にリストアップしたものを現実の

文脈での意味や関連性について目隠して教示し、習得することだけを期待する。教師は、他人に打ち勝つためにも頑張らなければならないのだと、生徒を孤独、独り言の世界に追い込み競争させる。

そこに「教えてもらえるからよく学べる」という教育依存が生まれ、競争相手である他人と真つ当なコミュニケーションを取らなくなる。さらに勉強依存が進むと、言われたことだけを覚えて答えが解れば良いのであって、自分で考えることや意見を述べること自体にも意味を感じなくなっていく。そして自ら学ぶ能動性がなくなり、コミュニケーション能力が喪失していくのである。

勉強主義のルーツは行動主義心理学である。目標を行動の言葉で表し、「理解させる」ではなく「できるようにする」で、達成か否かを検証する。そのため学習は、その過程をフローチャートによって計画し、スモールステップで効果を検証しながら進めるプログラム学習となる。個人能力還元主義となり、フィードバックによりやる気が起きるという考えから内発的動機付けを必要としない。また、学習項目を断片化して一つ一つができるようになることを目標とし、「分かる」「分からない」「意味」「意義」は問題としない。

見かけ上うまくいっているように見えるが、学習項目の意味や意義が分からないので忘れてしまうことも多くなる。しかしそれでまた、意味や意義を必要としない勉強主義で勉強させるから、学ぶ意欲が低下して脱落者が増え、コミュニケーション能力が低下し、自ら学ぶ根源的動機付けを喪失するという悪循環に陥る。現在の低学力問題は、学ぶことの意味が失われて、学びたがる人がいなくなっていることに根源的問題がある。

この事態を変革するためには、学習観を大きく転換しなければいけない。

人工知能の研究や動物の生態学的研究から、「分かる」ということが知的営みに重要であることに気づき、認知心理学として研究された。「分かる」枠組みである全体理解が、部分理解に先行（統合による分析）して「分かる」のである。

行動主義で学習した子ども達に簡単な計算を利用する作問を要求すると、現実世界につながらない全く意味不明な作問をする子どもが非常に多

い。これは、具体的、実体的感覚が失われて記号やルールの丸暗記になっているためであり、分かることの放棄である。

分かることは、何もかもが個人の頭の中で起きていることではない。文化によって思考の発達が異なることから、思考は社会的な関係で構成されているものであると考えられる（社会構成主義）。実際、思考は個人の頭の中だけで行われているわけではなく、その場の人、道具、環境との相互作用によって行われている。

ここで、学校以外の学びに目を向けると、「学習は教えとは独立の営みである」「学習は社会的実践の一部である」「学習とは参加である」「学習はアイデンティティの形成過程である」「学習を動機付けるのは、身近な現実の中で実践をしようとする」という特徴が見られる。

そこでの学びは、実践共同体に参加し、独自の有り様を活かして「参加」することである。そして、参加を深めることによってその共同体の中でのアイデンティティを確立し、そうしてそこに受け入れてもらうことである。これは現在、生涯学習で非常に有効に働いていて広がりを見せている。

本当の学びを求める人たちが実践共同体を作り、そこに参加しているのである。しかし、いくら実践共同体を作っても、お互い同士が共感的他者としてつながる関係を持たなければ参加が促進されない。このことから、学びの根源には「共感」があるといえる。つまり、人は他者との共感を通して世界を知ることになるのである。

人間は出生直後から共感能力が備わっている。赤ちゃんのもらい泣きは、12ヶ月までは自分と同じ月齢の赤ちゃんの声に感応して泣く（共感）。ところが、18ヶ月を越えた赤ちゃんは、自分よりも月齢の小さな赤ちゃんの泣き声にも反応して泣くようになる。これは、小さな赤ちゃんが泣いているから世話をしなければならぬ、放っておいてはならないと、母親に気づかせるために自分も泣いてあげるといった意味合いなのである。また、わずか生後10ヶ月で援助する者の存在を理解して、それを好むようになるのである。

共感的な関わりの大切さを生まれた直後から本

能的に分かっているのにもかかわらず、残念ながら私たちはそれを大切にしていない。

大きさの違う二つの円を同心円状に置くとドーナツのようになる。その小さな円の内側をI（私）、二つの円が囲むドーナツの部分をYOU（共感的他者）、大きな円の外をTHEY（文化的実践の世界）とする。現在は、IとYOUとの間のYOU的関わりが減ってきているといえる。

YOU的な関わりを作るうえで重要なことは、共に喜び、悲しみ、感動する横並びのまなざしである「共同注視」を持つことである。驚くべきことに、浮世絵の中には親子で共同注視をする場面を描いているものが多い。

現代は共同注視をしにくい情報環境になっている。しかし一方ではそうした状況を受けて、個人がそれぞれのディスプレイを見ていながら、全体で黒板を見ているのと同じ状態を生み出す共同注視を取り入れる技術や、共同注視をするロボットの開発などの研究が進んでいる。

それぞれのディスプレイを見ている個人に「共に」という感覚を与えるものとして、建設的会話システムがある。これは、気軽にリード文を選択して自分の意見を画面上に表示することができるシステムなのであるが、これを利用すると、最初はふざけていた生徒達も次第に真つ当な意見を交わすようになり、一生懸命授業に参加するようになる。それはこのシステムが、どんな発言にも意見を言ってあげるYOU的関わりを抱き込んでいるからである。

私たちは、YOU的働きをするTHEYを増やしていくことによって、文化と学びの世界に密接な関わりを形成することができる。そのためには、学校と社会との共感的な関係と共同注視が必要となるが、次には、電子的世界にどうやって共同注視を作り上げるかを考える必要が出てくる。

個人の能力を高めるためにだけにICTを利用するのではなく、文化的実践の世界に参加できるようなチャンネルづくりや、共同注視的な「共に」という感覚を深めていくためにも利用すべきである。実践例も少ない現状であるが、みなさんにはぜひ挑戦してもらいたい。

平成20年 3月10日 印刷  
平成20年 3月15日 発行

**北海道高等学校教育研究会**

印 刷 正文舎印刷株式会社  
札幌市白石区菊水2条1丁目4-27  
TEL (011) 811-7151  
FAX (011) 813-2581